

(一) (統)

號九十三百二第

可認物便郵種三第日四十二月二年十三治明
(行發日五十月每)行發日五十月一年四正大

號月貳

號十四百二第

四 恩 論

概 一

日蓮主義者の思想運動

本多 日生

時至れるにあらざるか

工學士 寺尾 與三

宮岡海軍中將を訪ふ

法華色讀論

關本大學林教授 關田 日城

▲本化記者團夫婦會の記

▲東京癡兵院參觀の記 ▲進軍の法數

▲精神の修養思想調整の著書に就て

影山 謙 二

陸軍少將 小原 正恒

天晴會講演錄 第三輯

天晴會發行 ■大正三年度 ■大正四年一月一日發行

定價金壹圓五拾錢

本文約八百頁
總クローズ上製美本日蓮上人御尊像及講演會寫真入り
送)内 地金拾八錢
料)朝鮮滿洲臺灣金四拾錢

萬古の偉聖日蓮の絶叫したる抱負識見は凜乎として人心激勵の活力を有す現代人は須らく日蓮の如き精力と意氣とを養はざる可らず人生優勝の地位は日蓮の大氣宇に感孚し得て眞に徹底的なりと云ふべし人間の全生活を無限に發展せんとする現代人は先づ必ず本書を讀むべし本書は日蓮魂に依て靈化せられたる名士の内的生活の公開なり内容の如何に豊富なるかは一讀して之を知るを得べし
直ちに一本を購ふて其の身心の莊嚴に努めよ身心の莊嚴と向上とは人生の重大問題なり此の大問題の解決指導は正しく本書内容の特色として紹介するを幸榮とする所速かに本書を讀め

内容

姉崎文學博士。本多大僧正。小原陸軍少將。松森權僧正。箕作文學博士。
臨田權大僧正。山田法學博士。柴田慶大教授。井村權僧正。小林文學士。
其他諸名士の説を讀め

發賣元

東京市神田區
美土代町二、一

三

秀

舍

發賣所

東京市小石川區
白山前町十七

三

上

義

徹

大正四年二月十五日發行(毎月一回十五日發行)

縮別 妙法華經並開結

第奇種 紙裝 正價金貳拾錢
第貳種 布裝 天 金 正價金四拾五錢
郵税金六錢

▲文明人は最高の思想に接觸するにあり、法華經は最高文明の中樞也、日本人は文明人也、故に本書を備へ之を精讀すべき也、菊判半截判にして携帶に便也

小原陸軍少將講

▲軍神加藤清正公

▲在郷軍人への施本には尤も適當なり二月廿八日限り申込にして百部以上は特に大割引をなすべし 一部は金貳錢 稅貳錢也

法華經講義

洋裝全二冊二千餘頁 定價金參圓郵稅金拾六錢

● 告 二 急 ●

本書は本多大僧正が心血を瀧いて著されたるもの、日蓮主義を研究せんとするものは必ず本書を一讀して甚深の妙義を味ふべし、未だ本書を讀まざるものは速かに座右に供へよ

▲橘香集並製 (稅金拾錢) 勤行作法 (稅金貳錢) ▼

日蓮主義者の思想運動

本 多 日 生

(大正四年一月二十四日高等商業學校に於ける天晴會第七回紀念大會講演)

日蓮主義者の天職使命は今更申すまでもなく、實に崇高であり又濶大である、随つて任重く道遠きは心ある者の日夜に忘るる能はざる所であり、一たび俗腸を洗つて其天職に鑑み使命を顧みすれば、自己の不敏にして且つ微力なるを感じ、喟然として長嘆大息せざるを得ないのであります、自ら日蓮大聖人の弟子日那と名乗り、日蓮主義の宣傳を以て任じ外護を以て居る者、冥想一番すれば、直ちに一種強烈なる刺戟を感じずには居られないうであらう、孟子が天下の廣居に居り天下の正位に立ち天下の大道を行ふと言つたが、このやうな精神は、苟も日蓮主義者たる已上、何時でも心に湛へられて居るべきであり、天下の廣居

に居ると思へは決して區々たる情實や小利害の爲めに言動を左右せられぬであらう、又天下の正位に立つと思へは、其職責の重大なるを感じて、儉安姑息の心は起らぬであらう、又天下の大道を行ふと思へは、瑣々たる學見教義に拘泥して、無用の辯難に没頭するが如きこともなからう、孟子すらこの抱負あり、日蓮主義者にして之に及ばざるあらば寔に慚愧の至りであり、又孟子の語に世に先覺あり後覺あり予は天民の先覺者なり、予之を覺ますにあらざして誰ぞとあります、これ亦移して我徒の覺悟とすべきであります、我々日蓮主義者は天民の先覺者を以て任すべき者、随つて世人の指導啓發を念とし、自ら任じて如何なる難局

をも回避すべきでない、「日蓮が弟子旦那は臆病にては叶ふべからず」との遺誡は、如上の抱負と覺悟とを示し給へるにはあらざるか、「徒らに山野に捨てん身の霜露の命を惜みて卑怯未練の行をなすべからず」との慈訓は、如何に心得べきか、今日蓮大聖人の御肖像の御前に於て、これ等の御遺文を拜誦致しますれば、我徒の心臓には一種の鼓動を起し、強烈なる刺激を感ずるのであります。

さりながら、我徒はこの大刺戟に鞭撻せらるゝと同時に、他面よりは復一種の清新なる大慰安を與へらるゝのであります。「玉泉に入りぬる木は瑠璃となる」とは、如何にも喜ばしき慰安であります、我等は個人として生、此死、彼致しますれば殆ど生涯は無意義のものであります、恰も凡木の松や杉の朽ち果つると齊しきものである、然るに法華經と云へる偉大なる道の爲め其處に教へられたる大理想の爲めに微力を貢獻致しますれば、玉泉に入る凡木の瑠璃に變ずるが如く、永久不滅の大功德を成就し、其力は大きな自利利他とな

これが日蓮主義者の本分であり面目であると信ずる。この本分を守り面目を全ふせんとするには、時機相應の活動を起し、時處位の要求に對し適切なる奮闘に就かねばなりませぬ、乃木將軍の歌に「武夫は玉も黄金も何かせん命にかへて名こそ惜けれ」とありませぬが、この心懸は我徒の本領であると思ふ、大聖人の遺誡に「百二十まで生きて名をくだして死せんよりは、生きて一日たりとも名を擧げんこそ大切なれ」とあり、清き名譽は我徒の重んずべき所でありませぬ、この本分面目を思ふならば、時處位に適當せる活動を忘れてはならぬ、「法華經は一經にて候へども修行する様は色々なるべし、大鬼神あつて此經を弘むるならば、身肉をも供養すべし、紙なくば手の皮をもはぐべし、國に紙充滿せんに皮をはいて何かせん」と、君子は時々移る、變通取捨の活機を會得し、天下の廣居に居り正位に立つて大觀せねばならぬ、若しも頑迷固陋を以て正義と誤解し、妄情に泥み法我に囚はれ、傲岸不遜を以て弘毅と混同するが如きことがあつてはならぬ、斯かる病

つて、始めてこの短かき人生この微弱なる自己の手に永遠と偉大とが握らるゝのであります。「一滴を大海に投げぬれば三災にも失せず、一華を五淨によせぬれば劫火にも萎まず、一豆を法華に投ずれば法界皆蓮なり」との慈訓は、何れもこの偉大なる真理を微妙なる警句に縮めて、吾等を慰安する爲めに留め給へるもの、即ち日蓮主義者が奮闘を續くるに當りて、若しも退轉の心を生ぜんとせば、其處に父母の慈愛となり、寂寞を感ずる時は、快活の情を起さしむる好同伴となり、絶へず我徒の心を愉悅の中に置かしめ給ふのである、縦し魚鳥を混丸して成せる身の人身に似て畜身に同じくとも、心に法華經を信じまいらせぬれば梵天帝釋をも恐れとなさずとの信仰となり、其處に大慰安あり、其處に大勇氣を生ずるのであります、斯くの如くに我々日蓮主義者は、日夜に強大なる刺戟を受け警策を加へられつゝ、それと同時に、他面よりは清新なる大慰安を與へられ、大信仰に生き大決心を有し、正義の戰場に立ち、常に前線に出て奮闘し得らるるのである、

見を以て日蓮主義に伴ふ必然の結果なるかの如く、世人をして誤認するに至らしめしは、果して何人の罪であらうか、我徒は互に相誡めて先づこの一凶を除かねばならぬ。

今日に於ける時處位に適切なる我徒の活動とは何であらうか、予は我徒の力を致すべき刻下の問題を左の諸點にありと思ふ。

一、僧風改良運動

尙も日蓮門下の僧侶即ち日蓮主義の宣傳者たる以上は、第一に其人格を修養して大聖人の御人格に接近せねばならぬ、而して大聖人の全人格は、無論多方面に傑出せられ居るが、少なくとも正義の觀念を養ひ、正を貴み邪を斥け、正理を以て思想行爲の標準とし、又慈悲の情操を涵養して嫉妬と驕慢とを滅め、瀾大な抱負を募めて瑣々たる事情より超出し、團結精神を重んじて異體同心の遺訓を嚴守し、大理想の下に絶待的信仰を捧げ、知法思國を念とし、慈愍濟生を願とし身、輕法、重の節操を守つて、獅子奮迅の勇氣を鼓勵し

氣魄信念に於て大聖人の御門下たるに耻ぢざるやうに、總べての僧員を陶冶すべきである、これが爲めには、區々たる利害に依つて排擠するが如き陋態は極力之を匡正し、進んで學見教義の異同を統合するにも、この濶大なる氣魄を本として進まねばならぬ、日蓮主義を發揚するには先づこの僧風人格の改善を以て緊要切實の運動なりと信ず。

一、信徒訓育運動

これも日蓮主義の信徒としては、正義の信仰を根本生命となすべきは勿論、進んで護法の觀念を發揮せしめ今日の如く寺院殿堂あるを知つて、教義法門の尊重すべく又その不振を慷慨する意氣を失ふに至らしめしは、尤も大なる失態である、各寺の布教其他に於て相當教導されつゝあるとは云へ、全國を通じて一大團結の下に日蓮主義者に相應したる資格を養はしむる爲めに、一種の組織立ちたる覺醒運動が起らねばならぬ、このまゝ荏苒経過すれば、大聖人の志願を實現する爲めに努力し貢獻する檀信徒は次第に減少し、卑劣劣惡

教義の爲めに、各々特色を發揮したる點あるは勿論なるも、他面には無用の辨難も少なからず、随つて大聖人の大精神たる諸乘一佛乘に歸しての志願に向つて全力を傾注することが出来ぬ、相互に無用の辨難に由つて勢力を相殺し來つて居る、御門下の意氣力量を外に向つて專注せしめたならば、法光の發揚は期して待つべきである、故に教義に就ても、無用の點若しくは時處位に就て與奪傍正を考量し、専ら力を皆歸妙法の大志願に注がしめねばならぬ、玄黃を略して駭逸を採り枝葉を去つて根本に歸り、陣容正々旗鼓堂々として進軍せしむるやう、こゝに教義刷新の大運動がなくてはならぬ。

一、教團統合運動

今や御門下は七派九派に分立し、教義制度布教學事經濟其他一切同等の聯絡もなく結合もない、各自衝突の有様にて経過して居るのである、然るに今日時處位的要求はこの小分立を許さない、少なくとも對外的布教と子弟教育の機關に就ては、適當なる聯絡提携を要し、

なる信徒のみ増加し、爲めに御門下全體に腐敗の氣を漲らすに至り、志ある僧侶は手も足も出さずこと出来ずなり、只これ等の陋習に阿附する無道念の者のみ跋扈するに至り、御門下自からが法華經の眞精神を傷害し壅塞するやうの事となり終るであらう。

一、信仰革正運動

これは前二項と關聯するが少し事柄が別である、從來正義の信仰を得たりと自任する僧俗に就ても、高く眼を著けて大觀すると、其信仰意識が不正確であつたり、又は萎縮退嬰であつたり、或る一種の派別的觀念に固著したり、小利小慾の爲めに大乘菩薩の本分を忘却したり、種々と弊づき、或は力を失ひ或は屈し或は曲り、或は濁り或は化石したやうのが多い、この際信仰革正を疾呼して清新濶大なる法華行者に相應したる健全にして且正確なる信仰を喚起する舉國一致の大運動が必要である。

一、教義刷新運動

御門下の歴史は各派分立の結果、内部の争闘に關する猶進んでは前記の各項に於ても能る限り統合を遂行するを以て、大主義發揚に利ありと認められて居る、教義や制度や色々急速に統合し難き點あるにもせよ、爲し能ふ點より漸次に統合を實現すべきである、又教義に就ても統合の方法其宜しきを得ば、思ふよりは平易に完了する事と思ふ、何れにしても大目的大理想の爲めには少々な利害得失に囚はれて、去就進退に惑ふてはならぬ、この統合運動も刻下必要な問題の一種でありませう。

一、對社會運動

宗教の根本目的が社會人生を救済するにあるは勿論、今日の世界の文明に對しても、其偏傾不備の點を匡救する爲めに、法華經の大理想を以て戰はねばならば、我國の社會狀態の改善に就ても、又其缺陷を補正する爲めには大に力を致さねばならぬ、教化救済の事業に就ても、又は險惡なる現象の防止に就ても、大に我徒の努力を要するのである、多少は御門下の内にも經營せられ居るも今後益々この點に對する活動を起さねばな

らぬ、日蓮主義者は他宗教に對してこの點に選色があらふと思ふが、これ亦大反省を要すると信ずる。

一、對教育運動

人心を指導する機關として、教育機關と宗教機關である、而して我國に於ては、兩者の間に適當な調節が取られて居らぬ、教育界には宗教の眞正な使命天職を認めない人々が多くある、宗教界には國民道德との調節に於ても、我國體の眞意義に於ても、又其教育の目的と調和協力する點に於ても、大に反省もし講究もすべきに、之を等閑に付し去るものが多い、斯くては健全な文明を創造して、我國より光を世界に輝すことは覺東ない、「日は東より出て、西を照す」との遺訓を奉戴し、又立正安國の大教義を有する我徒が、兩者の間に立つて適當な解決を促すは、蓋し其天分であらう、然るに我徒の之に對する熱心と運動とは遺憾ながら十が一にも足らぬ、ここにも大反省を要し、この種の運動に熱心を加へて、方針を取つて運動を起さねばならぬ。

一、對思想運動

我國の現狀に於て尤も憂ふべきものは何ぞと問はく、無論思想界の不健全なりと言はざるを得ない、而して國民の思想如何に由つて、萬般の事は興廢存亡するのである、孟子が其心に成つて其事に害あり、其事に成つて其政に害あり、聖人復起るも我言を易はずと斷言せしは、眞に千古の鐵案である、政事の頹廢は其社會の腐敗に基づき、其社會の腐敗は人心思想の不健全に基づくや明白なり、この事たる聖人出づるも反對するを得ないと言つて居るが、至極尤な主張であり、凡そ思想界に立つ者は何人も之を否定せないであらう、人心を一時に鼓舞するものは政治なるも、綱紀を千百世に維持し、健全なる文明を創設する基本は、無論思想の啓發指導に俟たねばならぬ、さて斯かる重大な思想界が不健全になつて居る、されば我國に於て、特に注意すべきは崇高なる道念の頹廢して、物質的小利小欲の爲めに没頭する者多き事にして、これには日蓮大聖人の如き高傑偉大なる人格と理想とを以て、其力強き感化

力を起して風潮を一變せねばならず、又個人主義の勃興し而かも不消化半熟の思想に囚はれて、我國建國已來研磨したる忠孝の綱常を輕視し、又博愛主義の鼓吹に遭ふて、東洋固有の仁義調節の徳教を閑却し、他面には忠孝の倫理を貴び、國家主義を重んずる人々の間には、固陋狹隘の觀念を脱却し得ずして、個人人格の完成を忘却し、其處に人生觀宇宙觀宗教信仰の眞正なる價值を領解するに至らず、又多くの宗教家は區々たる形式の末に流れ、若しくは只宗門教團あるを知つて人生國家の大事を閑却するあり、積年の弊習に甘んじ退嬰偷安の夢を貪り、死せる信條に拘はり無用の論辯に日を暮らし、未だ天下の廣居に居り天下の大道を行ふの大精神に反らず、斯くの如くに、個人主義博愛主義國家主義宇宙主義等の間に、各々偏傾割據の風をなして、國民の多数は其適從する所を失ふに至つて居るのである、これ等の時弊を匡正して健全なる大精神に立たしむべく、我日蓮主義者は思想運動を起さねばならぬ、この外にも猶我徒の奮起して力を致すべき問題

は存することと思ふが、今は之を略することにする。如上擧ぐる所の僧風改良運動、信徒調育運動、信仰革新運動、教義刷新運動、教團綜合運動、對社會運動對教育運動、對思想運動は各々何れも現今の時處位に於て緊要切實なる活動であると思ふ、而して予は今これ等の運動に就て、其價値の多少優劣を論明せんとするのではない、これ等の運動は互に聯絡あるが故に、寧ろ同時に各方面より勃發して東西相應じ、彼此相扶けて、大に氣勢を擧げんことを望むものである、然れどもこれ等の運動中に於て、天晴會は確かに日蓮主義者の思想運動を以て當面の目的として居るものであると思ふ、この思想運動は範圍も廣く効果も大きいのであり、濃達剛健なる意氣を以て進むに適した勇ましき運動であります、而して國家人生の側からして見ればこの種の運動を尤も切望する次第であると信じます。さてこの思想運動が日蓮大聖人の思召に照して果して如何に認めらるべきものか、又其思想運動の内容は如何なる性質のものなるか、この二點に就て聊か論明

を試みたいのであります。

日蓮大聖人の主義主張と其活動の範圍は、極めて廣く且つ多方面でありましたが、其當面の主張と活動全體の骨子は、何れにありしかと云ふに、確かに當時の我國の思想界に對し、大覺醒を促す運動であつたと思ふ、當時の日本の文化は佛敎を中心としたものであり、佛敎も僧侶の手に在りまするし、惟神道も僧徒の手より獨立しては居らぬ。

元來印度に佛敎の起つたのは、今日言ふが如く、道德哲學藝術人生社會等と分離して見る狭い意味の宗教の改革ではない、印度の文明は波羅門敎を中心として一切社會の組織が成り立つて居たので、道德でも風俗でも哲學でも宗教でも、凡べてが波羅門敎の教義を中心として起つて居たのであるから、佛敎が波羅門敎に對する改革運動は取りも直さず文明の改造でありませう、日本に佛敎が渡來して聖德太子に依りて宣傳せられた時も今日の狭い意味の宗教ではない、矢張り我國の道德學問藝術人生社會の各方面に大影響を與ふる所

のものであつて、即ち文明の改良でありました、而して傳敎大師弘法大師等に依つて佛敎の興立せられしも他面より見れば、神儒二敎を伴ふて我國の文化を神儒し開展したる大創設であつたのである、故に日蓮大聖人の當面の主張と云ひ、活動全體の骨子は矢張り今日の狭い意味に於ての宗教運動ではない、我國の文明を大成し、理想の文明を創設し、理想の國家を興立してこの理想の文明を以て、全世界を光被せんとするの思召であつたのである、決して佛敎中に一宗を開くを以て満足し、佛典中の一經たる法華を解説することを以て足れりとしたのではない、思想の根底を法華經に取りしは無論なるも、廣く當代の文明の要素を研究して當代の文明已上に一大進展を促されたものである、故に志は毎に國家に存し、人生に存し、閻浮提の大先覺者を以て任じて居られたのである、教主釋尊を除いては全世界に肩を並ぶるものなしとの自信を有し給ふて居るされば法華經を讀得する時は世法を體得すべきを説きこゝに有名な聖語となつて居る。

「天晴れぬれば地明かなり、法華を讀る者は世法を得べきか」

と、この一語を審思熟考せよ、如何に深遠闊大なる思想運動なりしかが知らるゝのである、遺文の智慧亡國書に云く

「法華經に云く、皆實相と相違背せずと、天台之を承けて云く、一切世間の治生産業は皆實相と相違背せずと、或る智者とは世間の法より外に佛法を行す、世間の治世の法をよくよく心得へて候を智者とは申すなり、般の代の濁りて民のわづらひし、太公望出世して、般の紂王が頸を切つて民のなげきをやめ、二世王が民の口にかゝりし、張良出て、代ををさめ、民の口をあまくせし、此等は佛法已前なれども、教主釋尊の御使として、民をたすけしなり、法華經の御心と申すは、これといの事にて候、外の事とはをばすべからず、大惡は大善の來るべき瑞相なり、一閻浮提うちみだすならば、閻浮提内廣令流布はよも疑ひ候はじ」

と、この遺文を熟讀して祖意の存する所を窺へば、世間の法より外に佛法を認めんとするを誤解なりとし、治世の法をよくよく心得へて候を眞の智者なりとせられて居る、この治世の法と云ふがこれ又今の所謂政治とは範圍が廣いので、徳敎も政治も救済も慈善も生活問題も、其他の文化を包含した意味である、故に治世の法即佛法との意味は、一言にして言へば、理想の文明を建設するが眞の智者であり眞の佛敎の發揮者であるといふことである、隨つて太公望と張良を擧げて之を教主釋尊の御使として民をたすけしなりと仰せられたので、この活釋この度量を領會して、大聖人の御活動の本旨を會得せねばならぬ、この間の妙旨が領會せられたならば、大聖人が佛敎の爲めに盡さるゝと云ふ言葉が、即ち日本の文明を神補し大成せんとするの意義であり、又法華經の行者と名乗つての働さが全く日本文明の爲めの運動であることが知らるゝ、斯く佛法と云ひ法華經と云ふを廣義に解する事が、當時の實際に照し大聖人の御本旨に合するものと思ふ。

されば大聖人が立正安國と云ひ、法を知り國を思ふと云ひ、他の誤を責めて破佛法破國の行動と叱斥せられし事は、これ皆國家の爲めに文明の大成を期するの意にして、思想界の健全に盡されしものであり、所謂今日の思想運動が大聖人當面の大活動であらせられたのであります、大聖人が佛教中の一部に屈し一小宗派を立て法華經と云へる一經典に没頭せられしものにあらざるは、之を安國論の弟子一佛の子として諸經の王に事ふ佛法の衰微を見て何ぞ心情的哀惜を起さざらんやと仰せありしに徴するも明白であり、而して大聖人は但佛教に屈せしにあらざるは、之を開目鈔の習學すべきもの三つあり所謂儒外内これなりと云ひ、三道に亘りて其長所を擧げて之を調節せられしに見るも、三道の思想を吸收し之を調和的に發揮せられしことが知らる、又但思想の爲めにすると云つても、學究的道學先生風に固陋な御考でなかつた事は、之を安國論由來にある此の國土を破壊せば佛法も隨つて滅盡すべき也の指教や、安國論の「國亡び家滅しなば佛をば誰か崇

むべき法をば誰か信すべきや、先づ國家を斷つて須らく佛法を立つべし」との明斷に見れば、實に卓卓たる活躍であり、更に廣く世法と佛法との調和を教へて宮仕を法華經と思召せと云ひ、五箇句の時も唯南無妙法蓮華經なるべしと仰せられし等によれば、如何にも人生社會に巧妙なる融化を教へ給ひしものである。斯くの如くに思想問題の全般に亘つて明斷を下し、之を以て我文明を大成せんとせられしものであり、所謂其心に成つて其事に害ありの原則を忘れず、安國論には人心亂るゝが故に國家亂ると誠め、又他書には法は體なり國は影なり體曲れば影斜なりと言つて、思想の輕視すべからざるを痛論せられて居る、之に由つて大聖人一代の大活躍は、今の廣い意味に於ける思想運動の大綱であり本領であつた事が知らるゝ、斷じて今所謂狭い意味の信仰運動が當面の本領でなかつたと思ふ、聖語に國土の御用ゐなからんは其の已下に法門申したりとて詮なしとあるは深く味ふべき所であり、これが對個人の信仰的救濟よりも一國の徳教を確立し

文化を翼成せんとの主意が正面の御主張であらせられし事を明白に語つて居るものでないか、故に予は斷言す、大聖人一代の活動の大綱本領は、廣義なる理想の文明を建設し、而して東より西を照すの大抱負に於て奮闘せられしものなりと。

されば今日の如き思想界の動搖して不健全の傾きある時に於て、大聖人の御門下が飛躍すべき當面の問題は、何なるかを審究するならば、其所に思想運動が一切の運動の中に於て、決して第二義に屬せらるべきでない事が分明すると思ふ、隨つて門下の僧俗の理想人格はこの思想運動に適するやう、教養せられ指導せられねばならぬと思ふ、自己が井蛙の屈見に陥れるを耻かしとも思はて不遜の言動を擅にするが如きは、大聖人の靈鑒の下に慚死するも足らざる大罪なりと信ず、予はこの意義に於ては今後も大に講明する必要ありと思ふ、日蓮主義發展の好機を逸すると否とはこの一事に懸ると思ふ、至誠大教の興立を念とする人は明瞭に正斷せよ、私心私利に囚はれて大教の興廢を口舌の間

に弄する輩はこれに關からず、日蓮主義者は固より區々口舌の徒を以て終はるべきでない、大悟一番を要することと思ふ。

已上思想運動に關する大聖人の思召を講明したれば次に其の思想運動の内容を語つて見たいと思ふが、時間が長くなりましたから簡短に要點を略説して見やう一言に之を言へば、我國思想史の體系を調べて其正統を發揮せられたのである、即ち我國思想史の體系は神佛の三教であり、而して其正統は三教の調和的活用である、故に大聖人は單なる法華行者ではなく、三教の眞髓を體現したる大偉人であり、一面より見れば聖人君子であり、他面よりすれば憂國の志士であり、又同時に如來使としての聖者善知識である、高僧であり國土であり聖人である、されば其主張の内容は三教の眞髓を兼備して居らるゝ、今之を證明するならば第一惟神道の神髓より見んに、一は我國の萬邦に冠絶せる所以を發揮する事である、之に就ては大聖人は八萬の國にも超えたる國ぞかしと云ひ、名の目出度は

日本第一なりと云ひ、小蒙古國大日本國に寄せ來ると云ひ、其他我國を稱歎して醍醐の國一實の國、大乘の國西を照すの國と云ひ、萬邦に冠絶せる所以を證明すること至れり盡せりである、二には護國の神を奉戴する事である、他の宗教は之を調節せんとしても其神聖を汚す者多く、況や之を自家信仰の内に調節し得ずして、之を嫉忌するが如き者は又儒者の無神論的思想の如き、又神道と雖ども我神明を以て宗教の絶對位即ち宇宙の神と解して護國の神たるの位置を動かし、却つて宗教の自由競争の渦中に投じて、其神聖を禍せんとする如き、何れも正系を失する者多き中に、大聖人は護國の神明としての正位を動かさずして偉大なる宗教本尊の中に調節し、且つ言ふ。

「念佛の行者は彌陀三尊よりの外は、上に擧ぐる所の諸佛菩薩諸天善神をば禮するをば禮拜雜行と名け又之を禁ず、然るに日本は神國として伊弉諾伊弉册の尊此の國を作り、天照大神垂迹御坐して、御裳濯河の流れ久ふして今にたえず、豈此の國に生を受けて

此の邪義を用ゆべきや」(遺五五四頁)

と、之に由つて見れば、大聖人は宗教信仰の内に護國の神明を尊敬せざる者を邪義なりと論斷し、自ら敬神の本義を發揮し給ふこと實に分明である、三には皇統の尊嚴を奉戴することであるが、大聖人はこの點に於ても大に力を致し、鎌倉幕府の勢威盛んなるの時に於て極力之を主唱し、身は刀杖の難に遭ふも意とせず、「權の太夫は民ぞかし隠岐の法皇は天子なり」と言ひ、神國王書(遺一三五四頁)には、我國開闢より以來臣を以て君と爲すこと未だあらざる事也、天之日嗣は必ず皇緒を立つとの文を弊いて皇統の神聖を明かにし、其他遺文の諸處に尊皇の大義を絶叫せられて居る、四には忠孝一本の道德を明かにすることであるが、之に就ても開目鈔には「孝子は慈父が王の敵とならば父を捨て王にまいるは孝の至りなり」と論じて、勤王即至孝と云ふの義を明かされ、五には發展的の抱負を失はぬことであるが、大聖人は常に一天四海皆歸妙法を主唱し、日は東より出でて、西を照す佛法必ず東土の日本よ

り出づべきなりと疾呼せられて居る、已上の五點は惟神道の真髓であるが、斯くの如くに大聖人は其真髓を發揮することに努力せられた國士であります、又之を儒教の真髓に就て考察致しますれば、孟子にある至誠にして動ぜざるものは古より未だ曾て之れあらざる也の一語に存すると思ふ、吉田松陰先生は東行の日のこの句を白布に書して袂別せられたのであるが、小塚原にて刑場に臨むの日、學問非薄にして至誠天地を感格すること出来申さず以て今日に立至り申し候と言はれたが、實に儒教の真髓を體得せられて居た人と思ふ、今、之を大聖人が護法純忠の志を抱いて龍口の刑場に立ち、天地を感動せしめられし至誠絶大なるに想到致しますれば、松陰先生の所謂天地を感動せしめ得たる人であり、即ち儒教の真髓を活現せられしものと言ふも過言ではあるまい、又二に數ふべきは士は弘毅ならずんばあるべからず、義を見てせざるは勇なき也と云ふ點に存するかと思ふが、大聖人の剛勇なりしは今更云ふまでもなく獅子王の如き心を持ち、迫害澎湃として

來るも決して退轉せず正義と終始せられ、月の満ち潮のさすが如くに邁進せられしは、確かに弘毅剛勇の士と稱すべきであり、三には大義名分を重んずることであるが、夷齊西山の故事を慕ひ三諫容れられず、去つて身延に入りたるは實に我國史の精華であると思ふ、四には仁義調節の點に存すると思ふが、之に就ても大聖人は佛教の本旨を體得せるが故に、日蓮が慈悲廣大ならばと云ひ、一切衆生一切の苦を受くるは日蓮一人の苦なりと云ひ、慈悲心に於て絶大の光を有し給ひしは申すも惶きことであると同時に、一般宗教家の陥り易き無秩序の博愛を誡め、左の如く宣言せられて居る先づ此の國の大王を敬ふて後に他國の王をば敬ふべし、先づ我父母を孝して後に他人の父母には及ぼすべし(遺六四二頁)

と、而して一切衆生を救ふ大慈悲を有しながら、自己の誓願は、我れ日本の柱とならんと云ふに見れば、其處に仁義調節の妙を得られて居ることが明かである、これ等の四點は確かに儒教の真髓であるが、大聖人は

其何れに於ても出色の意義を示されて居る、故に儒教より見ても大聖人は聖賢の域に達し君子の堂に昇れる人であると言はねばならぬ、見臺叩いて講談的に論語を弄ぶ儒者ではないが、其眞髓を活現したる達士であると思ふ、又佛教の眞髓に就ては之を論ずるまでもないこととて、其信仰の妙致と云ひ、四恩報答の實行と云ひ、菩薩行の實現と云ひ、周備せる教導攝化と云ひ、何れに於ても醇乎として醇なる者であり、天晴地明、知法思國、皆歸妙法の志願は、悉く佛教の眞髓を活現せられしものである。

斯く見れば日蓮大聖人の思想運動の内容は、我國思想史の體系を調べて克く其正統を發揮し、三教の眞髓を體現せられし國士にして君子であり、又是れ大乘菩薩の行人なることは明白であります、論じてこゝに至れば日蓮主義の思想運動の内容は、如何にも溷大することが領解せらるゝと思ふ。

徳川氏時代に儒者よりして佛教徒は人倫綱常を無視し破却するものとして非難せられ、又今日教育界より

して宗教は國民道德と調和し難く思はれ、又一般國民が諸種の小理義に囚はれ小思想に醉んで右往左往する有様は、皆是れ大聖人の如き偉大なる思想の感化を忘失するより來ることであると云はねばならぬ、今日の教育では人生觀の根據も立たず、倫理の根柢も薄弱であり、信念の確平たるものがない、斯くして徳川氏時代よりの淺薄なる儒者流の思想と、新來の歐米より來れる偏傾せる極端な思想と、宗教家の曲量偏見と、種々のものが合して時代思潮の病弊を現出して居るのであると思ふ、故にこの流弊を匡救する爲に、我徒は驟然起つて思想運動を絶叫せねばならぬ、而して日蓮主義の思想運動が時代の要求に對し異常の効果を奏し、又之に由つて數百年間屈して居た日蓮主義が大發展大飛躍をなすに至ることも、已に明々白々のことである果して然らば日蓮主義者の思想運動に於て、一層の奮勵努力を加へて道と國との爲めに貢獻し、玉泉に入りぬる木の瑠璃となる如く、小なる吾人も永遠不滅の大功德を成辨致したいものである。南無妙法蓮華經

四 恩 論

陸軍少將 小 原 正 恒

古人の語に「禽獸すら猶恩を思ふ況んや人に於てをや」とありまするが、鳩に三枝の禮あり鳥に反哺の養あり」とは人の知る所である。鳩は親鳥を尊んで三枝下に宿ると云ふことでありますし、鳥は百日間親鳥を哺養して恩を返すとのことであります、又獸は象ても虎でも恩を返すと云ふことである、是は私に幼少の時、親しく聞きました犬の話であります、餘程面白く感ずるのであります。夫れは私方へ出入する商人が、商用の爲め金澤市より南方白山の街道に在る鶴來町と謂ふ處へ通ひました。毎日早朝金澤を立ちま

ると、此犬何か肉を喰て其骨が上頸に刺り苦悶して居ることが判りましたから、商人は左手に彼の頭を押へ右手にて其骨を抜て遣つたさうすると、犬は尾を掉て何處へか去りました、其後夏の闇夜に、彼の犬後より來りて商人の裾を咬へて頻りに後に引きまする、始めは巫山戯と想つて叱りましたが、犬は益々力を込めて引張りまするので餘儀なく少し後に退きました、其時遠く風の様な音が聞へましたから不思議に堪へず路上に伏して其方面を窺へますと、犬大のもの數百、群をなし西北に向て行くので、是に於て氣が着いたのは、白山々脈に接ひ、狐が時々其身を冷す爲海岸に行くことがありて、昔から之に出逢ふて命を取られし者あることを思出しましたから、俄に恐怖心を起して其夜は

再び鶴來に戻り宿泊し、所謂「狼」の難を逃れたと云ふ
 實驗談であります、それから蟲類は如何であるかと申
 ますと、蟻が恩を報へたと云ふ話がある。それは一匹
 の蟻が泉水に落ちて將に死なんとする時、木の上に居り
 ました鳩が一枚の木葉を落して遣りましたので、蟻は
 之に乗て風の助を受けて岸に着き命が助かりました、
 其後獵師が兎を打たふとして山に入りましたが、兎が
 一匹も居りませぬので落膽して居りました折柄、偶々
 木の上に鳩が居りましたから喜んで之を打たふと、照
 準を定めて今や將に發射せんとする刹那、痛く足を刺
 戟されて思はず身體が顛へました爲に中りませんでしたし
 た、鳩は悠々として其場を去り命を全ふしましたが、
 是は蟻が鳩に恩を返さんとして其人の足に付いたので
 あります、之に依て考へて見ますと、禽獸の類に至
 るまで、報恩の事あるは明かであります。されば高等
 なる生活を營んで居る人間が、若し報恩の心がありま
 せんならば禽獸にも劣て居ると云はねばなりません、
 古來より先人の教へは、悉く報恩道德を鼓吹せざる者

はない、日蓮上人は報恩に就て四恩鈔報恩鈔等に高見
 を發表せられて居ります、四恩鈔を拜するに
 「一切衆生なくば、衆生無邊誓願度の願を發し難し」
 と仰せられてあるが、凡そ人間は物質上に於ても精神
 上に於ても決して孤獨の生を營んで行くことが出来る
 ものではない、必ず自他相倚り相助け所謂四海兄弟でな
 ければなりません。如何なる者も衣食住がなくては實
 生活を營むことが出来ぬのであります、其衣食住は
 自分の一身一家の力のみで出来たものではない。社會
 の多くの者に供給せられて生活上の需用を充たして
 居るのであります。又吾人が日本國民として世界文明
 の惠澤を享けるのは國家の御蔭である、東洋の多くの
 國々は或は既に亡び或は將に亡びんとする悲惨なる状
 況で、毫も文明の恩澤を蒙ることが出来ないのではあ
 ります、獨り我國は世界中の有らゆる文明を吸収して
 其惠澤に浴することを得るのは、全く世界の先覺者よ
 り與へらるゝ賜物であります。而して之に依て吾人の
 智識は進み、生活を意義あらしむることが出来るので

ある、故に此恩に報ゆるには公德心を養ふて凡ての人
 の爲に盡さなければなりません、私の聞いた一實例で
 ありますが、或る商人十五歳にして父を失ひ、其時の
 遺産は僅に五圓程であつた、此五圓を資本として商賣
 を始めましたが二十年の間に數萬圓の財産家となりま
 した、友人が其立身を驚いて、何うして斯様に成功し
 たか、何か之には商業上の秘傳が有るであらう、聽
 かせて貰ひたいと尋ねました處が、商人の云ふには商
 業上の秘傳として少しもない。唯だ公德を重んじて商賣
 をした丈であると申しました。其譯を聽て見ますと
 初め染物屋を致しましたが、一反を染て賣出すと十錢
 の利益がありました、そこで此利益は一人て取るべき
 ものか或は幾分か世の中に分けて遣るべきものである
 かと云ふことを考へた、元來商賣と云ふものは世の中
 に買ふ人が有るからである、世の人の御蔭で始めて商
 業生活が出来るのであるから、此の利益は半分は世の
 中の人に分けて遣るのが當然であると云ふ處に思ひ付
 き、一反に付純益十錢の半分は自己の收入とし、残り

の五錢は世の中へ分けて遣る見込で、夫れだけ染物に
 氣を付けた方が宜からうと、爾後一反を染めるに五錢
 宛念を入れて賣出した、そこで其買ふ人は初め見た處
 では念を入れたものも入れなかつたものも格別の違を
 見出さなかつたが、一度洗濯して見ると直ぐに其違ひ
 が分つて来る、そして其店から賣出した物が次第々々
 に世間の信用を得るやうに爲つて、人々相争ふて買ふ
 ことになりましたから、一層染料等に注意を致して、
 段と世の信用を重ねる様になり、其店が繁昌を致して
 成功したと云ふ話があります、是れ全く世の中
 の恩と云ふとを知り、其恩に報ゆるの考へがあつたか
 ら成功したのである、即ち公德的商賣であると云ふべ
 きであります、總ての人は斯様に信義公德を守ること
 を心得て居なければならぬ、是れは唯だ實業家のみで
 ない、如何なる生活に在りましても、斯の如き修養を
 積み、吾が現在の生活を省みて衆生の恩に報ゆるこ
 とを忘れてはなりません、二には父母の恩であります
 が、日蓮上人は

「孝は高なり天高しと雖も孝よりは高からず孝は厚なり地厚しと雖も孝よりは厚からず」
 と仰せられて居る、父母の恩の洪大なること言葉を以て言ひ盡すことは出来ない、既に其恩の高く且厚きことを感ずるならば、身を以て孝養を致さなければなりません、凡そ如何なる動物でも其乳兒を愛せぬものはないが、其乳養の時間が頗る短く其愛も亦長くはありませぬ、然るに人間に於ては、母親は自己身體の營養を分泌して小兒を乳養すること少なくも一年、而して尙數年の間養育の勞を取るのてある。人は八九歳に至るも無人の孤島に獨居せしむる時は餓死を免かるゝことが出来ない、父母の子を養育する時間の眞に長きを知ることが出来る、年既に長ずるも、父母の子に對する注意は周到を極めたるものであります、日蓮上人の御言葉を行するに
 「今生の父母は我を生んで法華經を信ずる身と爲せり」とありまする如く、身體の上にも精神の上にも、何に

呉れとなく心配を致しまして、子の幸福を祈るは我身の幸福を願ふに勝れるの思ひに在るのであります。若しや其子病むことがありますれば寢食を忘れて之を看護し、其情の切なる言語を以て言ひ表はすことは出来ません、されば其子不幸にして惡風に感染し墮落する様なことがありますれば、深く之を心配するの餘り或は生命を縮めるの例も亦尠くはありませぬ、斯様に大恩を受けたる父母に對し如何にして報答すべきであらうか、凡そ孝の道は、境遇の順逆に應じて適當に之を盡さんと欲するは容易の事ではありませぬが、廣く東西古今に於ける孝子の事蹟に鑑みて自ら覺る處なくしてはなりません、昔より孝子の美談は史上に躍出して居りますから、さう云ふ活歴史を讀んで其心を振盪することが大事である。今こゝに一例を申せば、櫻町天皇の元文中に大阪の船子勝浦屋太郎兵衛と云ふ者の子供が三人ありました、姉は市、妹は楨と申しまして十五歳、所謂雙子でありました、實子に長太郎と云ふのがありまして此れは十二歳でありました、然るに

此三人の子供が、父の罪ありて死刑に爲ると言ふことを聞きましてより、殊の外心配致しまして何と相談致しましたか、銘々に自筆の願書を認めて町奉行の處に参りまして之を差出し、是非とも父の命に替りたしと申出でましたが、其中の文に、二人の少女の願書には長太郎は養子の事でもありませんれば其れは御助け下さりて、私共二人は父の身替りに御立て下さる様にと書いてあり、又長太郎の願書には養子の事ではありますけれども何卒私をも二人の上に加へて下さる様にと書いてあつた、而して何程論しても聽入れず母も懇々論して見ましたが一向承知せぬ、實に決心の體なれば奉行所にも大に持餘して、遂に江戸何と言ふことになりました所、江戸にても三人の子供の堅固なる志に感ぜられてか、遂に父の死刑を宥されて追放に處せられたと云ふ事があります。此子供の心に何とも云へぬ美しい情がある様に思ひます。處が此頃聞く處に依りますれば、愛知縣小牧村に某なる農民があり、其長男は孝心の者であつたが明治三十七八年の戦役に

名譽の戦死を遂げた、其二男は頗る放蕩者で父の財産兄の扶助料送も遣ひ果し、其上己れの一子三歳になるのを父の處へ置き去りにして、何れへ行きしか姿を隠して仕舞つた、父は七十二歳の老體を以て田畑を耕し、纒に孫と自分の露命を繋いで居ると云ふ事實を聞きましたが、耳にするだにも忌はしき事で、之等は實に世にも性根の腐つた不孝者と謂はねばなりません、這う云ふ不埒な所行をするものが、高等の教育を受け又は中等以上の地位にあるもの、中にもある様であります、けれどもそれは人道に背いた行爲でありますから、其ものゝ人格は劣等である、紳士となる事は出来ないのであります。尤も内省すべき大事は父母に事ふる道であります。更に國王の恩を説いて
 「天の三光に身をあたゝめ地の五穀に神を養ふこと皆是國王の恩也」
 と道破せられて居る、抑も日本の臣民が、深く心に銘じて遺れてなりませんのは、我が日本の國體の精華であります。我國の國體は、上に萬世一系の天皇を戴き

奉り、下には開闢以來天孫に供奉して斯の土に参られました神人たちの子孫を以て固めたる國であります、夫れ故に君臣上下の間も自ら親密にして他の國に類例を見ることが出来な、即ち歴代の陛下、常に臣民の家門の永く久しく積かんことを望ませ給ひて詔勅を下し賜ひ、臣民は又天皇を神の如く敬ひ奉り、誠忠奉公の念に充ちて居るのである、心地觀經の報恩品を見ますると左の文がありまして、能く列聖の御高德に一致して居ります様に拜します。

「世間以レ王爲ニ根本、一切人民爲ニ所依、愛ニ念衆生、如一子ニ養ニ育者年ニ極ニ孤獨、賞罰之心常不二、如是仁王爲ニ聖主ニ群生敬仰等ニ如來」

とありますが、此の文を讀みまして、吾が列聖の高德の甚大なる意義を説けるものと存するのであります。日本臣民は斯かる尊とき列聖の仁愛に愛護せられて居るのでありますから、この洪恩に報答する精神がなくはなりません、而して世態の變遷文化の進歩と共に盡忠の誠を致すにも大に注意せねばなりません、その

である清正公は、日蓮主義の信仰家でありましたが、朝鮮へ出征して居られました時、石田小西等の讒言に由りて豊太閤の疑を受け遙々呼返されましたので、切腹でも命ぜらるゝ事と思ひ、其命の下るを待て居られました、所が其時は慶長元年で、其間七月十二日と云ふ夜に古來稀なる大地震がありました、洛中洛外伏見大阪邊は、家は一軒も残らず倒れたと云ふ位に死人杯は其數も知れぬと申しますが、此時清正公は大地震と思ふや否や、自身は御不審の掛かりし身なりと云ふ事をも忘れて、夫れ大變だ上様はどうされたかと唸ね起きて、二百人の足輕に鎧々鐵挺を持たせ、若し太閤が梁にても壓されて居らるゝならば其れを撥退けんとの用意にて、諸侍を引連れ取る物も取敢へず、伏見城に駆付けつか／＼と太閤の御座の邊に参られて見ますと諸大名は未だ一人も登城する者はなく、大庭には敷物を敷き屏風を立て廻はし大提灯を點し、太閤は御側の人と何か言はるゝ聲を聞きまして、扱は疾に出てられたか夫れでは先づ安心だと思ひまして、御附の女

根本の精神を鞏固にして奉公致すべきである。一國の發展は、其凡ての方面に充實を圖るべきは勿論の事であるが、若し學術智能のみ進んで、吾國體を遺れ道徳を忘れて居るならば、全く其本來を錯り其順序を失ふものであつて、恰も砂上に宮殿を築くと同じく、危険の上も無いことあります、而るに此の莊嚴なる國體を無視し、自己の一身の利益を得んことを企て、列聖の仁愛に背ける大逆無道の者が出てたる時代がありました、此に於て楠正成、新田義貞等の忠臣は、一身を犠牲にして不忠者を絶滅せんと努力奮闘したのであります。又宗教上に於ては宇宙の王たる本佛に背き經王たる法華經を無視せる謗法者が横行せる時、日蓮上人は立正安國主義を唱へて佛法の大義名分を明かにすると同時に、最尊經王の法華經と萬國に比類なき日本國と因縁結合を説き、法國冥合の義を明かにせられたのである。斯の如く、上人は思想上より民族道徳の本源に立つて、神聖なる國體の精華を發揚し、君恩の厚さに奉答致されたのである、彼の古今無雙の名

中に聲を掛け、此地震では上様も梁杯に壓されてはあはしまさぬかと存じまして、若し左様の事も有りたらば一大事と思ひ鐵挺をも用意して参りました。先づ御無事で安心致しましたと大聲に言ひ聞かせ、重ねて又無實の罪なる事を述べられましたから、太閤も朝鮮に在りて陣中生活久しきに亘る清正公の姿を見て、兩眼に涙を浮べまして心中に深く其忠誠を感ぜられたと云ふ事で、斯かる危急の場合に當りて、一身の利害を捨て、走せ参じた精神、この主を思ふ精神が尊いのである、是は舊き昔しの道徳でない、今日の吾人は陛下に對し奉公忠誠を致さねばなりません、第四の三寶の恩は、特に上人畢生の主張にして思想上に於ける大問題である。

「果地の三分の切徳二分をば我身に用ひ給ひ、佛の壽命百二十迄世にましますべかりしが八十にして入滅し、残る處の四十年の壽命を留置て我等に與へ給ふ恩をば、四大海の水を硯の水となし、一切の草木を燒て墨となし、一切の獸の毛を筆とし、十方世界の

大地を紙と定めて注し置くとも、争てか佛の恩を報じ奉るべき、法の恩を申さば、法は諸佛の師也、諸佛の貴き事は法に依る、されば佛恩を報ぜんと思はん人は法の恩を報ずべし、次に僧の恩をいはば、佛資法資は必ず僧に依て住す、譬へば薪なければ火なく大地なければ草木生くべからず、佛法ありと雖僧ありて習傳へざれば正法像法二千年過ぎて末法へも傳はるべからず、乃至然るに末代の凡夫三寶の恩を蒙て三寶の恩を報ぜず、いかにしてか佛道を成ぜん

以上の聖訓を拜して無量の力あることを感ずるのであります、吾人は實に本佛の功德を譲り與へられて、立派なる活動を爲し得る資格に居るものである、即ち本佛の愛子であります、佛の御教に従ひ之を實行せば大なる發展があるのであります、釋尊は主師親の三徳を具へ給ふて三千世界を支配せらるゝ思想上の一佛王であります、他の佛とか菩薩とかは假想的でありまして一切の人類を平等に救済する實力を有つて居りません

斯様に一切衆生の恩父母の恩國王の恩三寶の恩は人間の道として當然之を踐み行ひ、其一方に偏してはなりませぬ、さうして此四恩に報ゆるには、一點の曇りなき至誠心がなければならぬ、至誠心がなければ如何に形式が整ふても、一切皆無意義であります、勸諭を拜しますると、軍人の心得として五個條を御示しになり、其終りには一の誠心こそ大切なれと仰せられてあります、誠心と云ふ土臺がありまして始めて實行があるものであります、天地を貫く底の至誠があれば萬世にも胎程の立派な仕事が出来、勸諭に「心だに誠あれば何事も成るものぞかし」との仰せは、千古不磨の聖訓であります、又戊申詔書には誠と云ふ文字は表はれて居りませんが、其八個條中、「上下心を一にし、勤儉産を治め、惟れ信惟れ義、自彊息まざるべし」との聖意の實行は誠心でなくてはなりません、教育勸諭には誠心と仰せられずして徳なりと示されてあります、即ち「眷々服膺して成其徳を一にせんことを庶幾ふ」とありまして、其徳の本源は、勸諭に明示されたる誠心に歸

然るに假想の佛菩薩に思ひを寄せて本佛の大慈悲を忘れて居りますのは、不知恩の極であります。殊に佛教徒にして本佛渴仰の信念がありませんければ、佛教徒でない外道である、阿彌陀佛や大日如来は責任せる佛でありませんから、吾人とは少しも精神關係がないのである、それ故に如何に六字の名號を百萬遍唱へた處が骨折り損の草臥儲けて、一向精神上に獲る所はないのみならず、當然尊敬すべき本佛に背いた罪惡は、觀面に吾身に振りかゝりて恐しき結果に相成るのであります、背向上下と云ふ思想の傾向は、其影響する所甚だ廣く且つ大なるものであります、私の考へます所では、日蓮上人一代の活動は、此三寶論の理義を明にして思想の中心歸向を示さんが爲に、あらゆる非違の思想を折伏痛撃せられたのである、而してこの三寶論の發揮は思想問題の大運動であると存じます、若本門の三寶論が、誤りなく人心に理解せらるゝ様になりますれば、必ず熱烈なる宗教的信念が起ることであらうと思ふ。

すること、拜察致します、誠心は一切の本である、其誠心の發動して善行となつた場合が、勸諭の徳目に當りますので、即ち或は忠或は孝或は仁或は義と云ふのであります、斯の如く誠心が事業の上に發動して仁義忠孝の美德となりますれば、こゝに始めて四恩に報答することが出来るのであります。四恩の報答は、宇宙の法則にして人倫の綱常であり、又我國民道德の精華であると信するのであります。

近來、思想上の自由批判を楯として、我國民道德に異説を唱ふるものもありませんが、何れも證據薄弱にして取るに足らぬ、我日本の道徳は民主的思想に因はれたるものゝ窺ひ知る所でない、其徳本の淵源する所極めて幽遠にして微妙である、支那及び歐米人の考察するが如き民本利益の思想ではありません、忠孝一致主義であります、忠孝分離の道徳思想は、我日本の建國の本義より肯定することが出来ませぬ、一步を進むれば、忠は百行の基本である、故に我國民は此の自覺に立て四恩に報答することに努めなければなりません。

本化記者團——夫婦會の記

生 碧 白

吾等は本化の實相を實現せんとする雄大な前途を
 目算して進むもの、徒らに教權制度に囚はるゝことを
 許さない、吾等の運動は單に宗教内部の革新の叫びで
 なく、健全なる思想戒壇樹立のためである、的確なる
 民族發展のための事業である、從て精神的勞力の多き
 は言ふまでもないけれども、その生活状態は極めて貧
 弱である、この貧弱なる實生活に在りながらも、勇ん
 て難事業なる文書運動に熱するは、固よりその天分の
 自覺に因るとはいひ、その背後に親切なる援助の在る
 にあらずんば、どうして自由に大膽に敵前に突撃する
 ことが出来やうぞ、日々精神的事業に努力して疲勞を
 覺ゆるも一たび家庭の人となるの時、婦人がその信仰
 の心と喜びの態度を以て接するならば、凡人たる吾等
 いかにか力強く感ずるであらう、そこに何とも云へぬ無

上の慰安がある、而かもこの慰安が消極的でなく、
 積極的に吾と吾が心を勵まして、道の爲に盡さばやと
 おもふ、吾等はつねに物質に於て甚だ乏しければ、妻
 女が内に在りて家政を處理すること一通りの骨折りて
 はないことを知る、吾々の同志は皆さう云ふ感想を持
 て居る、さりとて、平常家庭に於て、妻女の前に謝意を
 表するもあまりに新道徳主義で手数が掛り過ぎる、仰
 仰しい形式を離れて、精神的に妻女の慰安會を催さう
 かと、同志の間に議は一決し、相互の夫婦打揃ふて會
 合すると云ふ事、會名を夫婦會と名けた、そこで本
 化記者團より各社へ發送したる案内狀は

敬啓、吾等奮力ながらもつれに大法の宣傳に健闘致し居り候事、決心
 之に超ゆるもの無之、且つ吾等同志が團結當年の宗教團結の理想
 は、近時著々として實現の機運を呈するに至れるは、是亦同慶に堪へ
 ざる所に候

おもふに、吾等が外にありての運動は、その使命自覺の存する所以に

あるは勿論の儀に候も一面には内に其き女房殿の方ありて家事整理の
 重任に當らるゝものあるがゆへなりと信ずる所に候「男の仕業は女の
 力なり」との聖句に尊とくおぼえ申し候、さればこのたび、本團團
 係者の夫婦會相開き候て、互に其親しき愛を温めたく、之に依てあらは
 るゝ功德は「女房軍團の結合」「女房殿の慰安」を興へ得ること、存じ候
 間、必らず夫婦打揃ふてこの清き意味ある座席へのお集りは「夫婦道」
 の圓満を期する儀と存じ申し候、御用事御都合有之候事には候に
 んも、さる理由などを以て御座席相成候ては近頃甚だ感心仕らず候、
 その日一日は婦人の慰安日と致したく候、
 追て御社内に今現に獨身の社員在勤に候はば、何卒御誘へ御同伴可然
 將來夫婦道の身證者として特に破格の優待致したくと存じ候

斯くて一月二十日午後三時淺草 雷門よか樓の三階

に開いた、用務の爲め缺席の社もあつたが會するもの
 「統一評論」「法の響」「日宗新報」「村雲」「統一」「日宗新
 聞」「新世界」「布教」の八社、何はさて、四年來毎月一
 回宛相會して、交情を温めて居るのだから隔意のない
 挨拶振り、肉身の兄弟も斯うはなれぬとおもふ程、そ
 こて口も八丁手も八丁の一騎當千の本化の戰闘員なれ
 ば、誰が火蓋を切るともなく魔軍撃退の論戰に花が咲
 く、婦人達は初對面のものもあつたが婦人は婦人同志
 ていつの間にか話し合つて居る、丸て一人の母より生
 みなされた姉妹のその様に、さうして何の婦人にも

かよはき女の力を献げて夫の事業を扶くる心の苦勞さ
 と御教の爲にはどんな辛い事でも忍ばねばならぬと、
 さう云ふ健氣な覺悟がありくと見える、何と云ふ尊
 といことであらう。

次で、よか樓主の寄附餘興としてりう馬の落語二席
 が終つてから、夫婦相對して晚餐の席に就いた、食事は
 西洋式だが魔胡付く婦人は一人も居ない、順次に
 片付ける御手際の宜さ加減、宴酣にして、各自の住所姓
 名を名乗り上げ、感想交々湧いて和氣横溢の體、中に
 も加藤鷺風兄の愛子、四歳の春野嬢が御酌をして廻
 つたなどは一段の愛嬌であつた、かくて男子達の萬丈
 の氣焔いと高く、法螺の鼓は鳴りていつ果つべしとも
 見えざりけるが、折しも淺草寺の鐘の音は十時を告げ
 ぬ、公園常設の餘興はこの次に觀ることとして夫婦會
 を閉じた、さうして夫婦は打揃ふてその家庭に、げに
 や意味の深い一日の清遊であつた。

宮岡海軍中將を訪ふ

三上白碧

(某日赤坂町の町に宮岡將軍を訪ひ、將軍の宗教に關する感話を聽く、茲にその要領を摘記して讀者に告ぐるを喜ぶ)

▲因縁深き信仰

私の眞家は眞宗でありますから、祖先の墓碑は今尙眞宗の寺の境内に在ります、けれども別に信仰の意味はありませんが、唯墓碑の關係に過ぎないのである、私は以前から禪宗の僧侶には親しい知人がありますので國へ歸りました時などは其人に祖先の追善回向を頼んで頂りました、日蓮上人の人格教義を鑽仰致す様になりました、詳しく事は存じませんが、日蓮上人の雄大な思想抱負に觸れることが出来ましたから、之まで佛壇に祭つて居りました阿彌陀様の像を取り除けまして、日蓮上人の御認めになりました御本尊を安置致して居ります、斯様に、私は現在、日蓮上人の教に導かれて居ることを感謝して居るのであります、實は子供の時に祖母に連れられて法華宗の寺に參つたことがある、それは金

澤寺町の妙立寺であつたと思ふが、その寺に日蓮上人の御像がある、この御像の靈驗利益のあることは、非常に名高いもので、曾て寺が火災に逢つた時、御像はちやんとして居つたと云ふ話を聞きましたが、それは火事の時、熱心なる信者が命懸けて焔々と燃えて居る火の中から、御像を背負つて災厄を免れて居つて、火の消えると共に原の位置に祭つて置いたから、火の中にあつても焼けなかつたと云ふのであります、是も熱心なる信仰の手によりて火の中に在りも焼けぬと云ふ道理になりますので、皆悉く偉大なる高德の然らしむる事であると思ひます、斯う云ふ寺へ子供の時に連れてられて參つた私が、現在上人の教に歸伏して居ることなどを考へますと、そこに何となく不可思議なる因縁のある様に感ぜざるを得ないのであります。

▲墓碑に就て

私は各地を旅行するたびに、其地の名ある墓所を參拜致しまするが、五代六代と一所に建てられて居る墓碑は少ないのである、關西方面にはどうも見當らない、關東には箱根の早雲寺に北條早雲五代の墓碑がある、伊豆の韮山の江川家では、二十六七代も一菩提所に墓碑が建てられて居る、江川家は初代より日蓮上人の教を信奉して居られる、菩提寺は日蓮宗である、一家が斯様に永く續いて居るのは珍らしい事で、生活上の波瀾が無いからでありませう、從て何とも云へぬ深い意味の幸福があると思はれる、それは一種の因縁にも依ることであらうけれども、日蓮主義信仰の功德と見るのは誤りてないと思ひます。信仰の根柢が確實にして熱烈でありましたれば一切の事に其力が加はりますから、所謂光明に輝ける法悦の境涯を實現することになりませう、古人の語に積善の家には餘慶ありとありまするが、誠にしてなければならぬと思ひます。

▲位牌に就て

昔しより佛教徒は宗旨の如何を問

はず、死亡者があれば俗名を改めて法名を付けることになつて居る様であるが、それが何處の家庭の佛壇に祭られて居る、即ち位牌である、この位牌が一人の死亡者あるたびに作ると云ふ事になると、家系が永く續きますれば多くなる譯で、數多くなりませすれば自然粗末にする虞れがある、之等は家庭の教育上特殊の關係があると思はれる、私の考へては、一つの位牌に刻む様にしたらばどうであらうか、さうすれば數代の子孫に至つても平等に敬意を表して粗末にすることはないかと思ひます、こう云ふ事は極めて些細な問題の様であります、家庭倫理の上には甚だ大なる關係があると思ふ。

▲奮闘は確信より生ず

人生に確信がなければ何事も出来るものではない、意味ある事業は決死の奮闘を要するのであります、奮闘は確信より生るゝもので、確信の前には死生を達観せる用意があります。この死生の問題が起りますときは、そこに自己以上の或偉大なる絶對を信ぜ

ずには居られないのである。けれども世人はその點にまで進んで得ない、唯だ自分の任務を果たすために働けば扶かるものであると云ふ位のものである、自分も以前はさう云ふ考へてあつた、然るに日蓮上人の教を敬仰するに至り、吾々の仕事が無減であることを理解することが出来たばかりでなく、絶対の佛陀がつねに吾々を救済せんがために慈悲の活動を爲されて居ることを解了することを得ました、故に私は佛の實在を信じて、人力のあらん限り奮闘する所に吾々の向上發展があると存じます、處がこの廣大なる教に對して、慢りに彼是と理窟を並べるなどは反て疑を起す基である、學者の研究は別として家庭などにありては、六ヶ敷い宗教上の理窟は子供には役に立たぬ、子供には自分の過去の實驗に徴して誤りがないから信ぜよと教ゆるのが宜いとおもふ、信仰は理窟では起らぬ、今後の兒童には一段と奮闘の精神を持たせねばならぬのであるから、宗教的の萌芽を育て、行くことが大事である、さうしてその確信が鞏固であれば、萬難を排し

て勇猛の奮闘を續けて行くことが出来る、確信がなければ事に當りて成し遂げる力がないのみならず、人間道徳の情義を缺くことになり、唯だ形式を装ふて得たりとする様になり、丁度朝鮮人が之を證明して居る、彼等の生活は無秩序である、秩序なき國民生活は亡國的徵候であります、私は曾て用務を帯びて支那暹羅安南等へ行きましたが、其國民は依頼心が強くて利己的で、何事も捨て鉢と云ふ風で責任を重んじない、こう云ふ状態であるから國家の消長に關する大問題が起つても、身を挺して盡すものがないのである、朝鮮には佛敎の形式さへもない、暹羅の如きは多造寺塔主義であるから、宏壯なる堂宇はあるけれども教の權威がない、大乘佛敎の眞精神は發揮せられて居らぬ、凡そ其國に健全なる思想の勃興して居ると否とは、直接に國民の元氣に影響を與へ奮闘力に關係があるから、日蓮上人の宣傳せられたる大思想を奉じて確信を築き各人の職分に努力する様に心懸けねばならぬと存じます。

法華色讀論 (三)

顯本大學林教授 關田日城

三 法華は始中終色讀主義を誨ゆ (上)

法華經を觀る方面も澤山あるが、全經典を通じて、我等が爲に人生の自覺を説く處にも、佛陀の救済を説く所にも、經典の廣宣傳道を訓ゆる處にも、人倫道徳を示す處にも、此外如何なる場合にも、吾人を刺戟し激勵しつゝあるものは、所謂法華經主義の實踐躬行であつて、即ち始中終、一貫して色讀主義を誨へて居ることである、故に法華の序分無量義經には

「是ノ經ハ諸佛ノ室宅ノ中ヨリ來リ去テ、一切衆生ノ發菩提心ニ至リ、菩薩所行ノ處ニ住ス(無量義經)」

とある、此意味は、此の法華經は、諸佛の大慈悲とい

へる室宅より源を發し來り、其佛心が、一切衆生の心に響きを與へて、信仰心となり、發菩提心といふて自ら宇宙人生の根本を悟り自利利他の大道念を發すに至り、更に此の衆生の心は開發し、善根功徳を實行し人を益し世を利用する所の菩薩行となる、此處に法華經は住して居るといふので、要するに法華經は其主義を實行する所に存在止住して居るといふ意義で、此の無量義經の文は、法華經とは即ち色讀主義そのものなることを證明したものである、これより色讀主義の方としての法華經をば全經典に亘りて、概観して見ようと思ひますが、開卷劈頭、序品を讀むと多數の列座衆を擧げてあるが、其人々の悟道に達した活動振り色讀振りが、如何にも凱切であり又活躍して居て、末代の吾等

を鞭撻して居る心地がある。

「皆陀羅尼ヲ得樂說辨才アツテ不退轉ノ法輪ヲ轉ズ(序品)」

陀羅尼とは總持と譯し、含蓋多き根抵深き語を言ふので、薄つべらな纏りの附かぬ演說や說教で御茶を濁して居る連中などは先づ陀羅尼を得る方法からして考究すべきであらう、不退轉の法輪を轉ずとは、實に法華式の活語である、法を説き世を誨ゆるには不退轉でなければならぬ、不信身命の常轉法輪でなければならぬ日蓮上人が

「日蓮一人聲モ惜マズ唱フルナリ」

とは此不退轉法輪の語を色讀せられたものであらう

「衆ノ徳本ヲ植ヘ常ニ諸佛ニ稱歎セラル(序品)」

「慈ヲ以テ身ヲ修メ善ク佛慧ニ入ル(序品)」

これらは衆の徳本を植ゆるといふ道徳的行爲が、即ち諸佛の稱歎を蒙り、能く佛慧に悟入すべきを教へたるもので、佛道に入り大悟大覺の境に昇らんと欲せば、徳を植へ慈を施して、他を利し自を利すべきを説き道

勇猛精進ナルアリ——安禪ニ合掌シ千萬ノ偈ヲ以テ

諸法ノ王ヲ讚スルアリ——智深ク志固キアリ——

衆ノ爲ニ法ヲ講ジ魔ノ兵衆ヲ破シテ法鼓ヲ撃ツアリ

——地獄ノ苦ヲ濟ウアリ——未ダ嘗テ睡眠セズシテ佛

道ヲ求ルアリ——戒ヲ具シ威儀缺クルコト無ク淨キ

コト寶珠ノ如キアリ——忍辱力ニ住スルアリ——諸

ノ戲笑及ビ癡ナル眷屬ヲ離レ知者ニ親近シ一心ニ亂

ヲ除クアリ(序品)

これらは佛世尊が法華色讀の行者の爲に、求道の熱誠を教へ、品行の端正を誨へ、勤勉力行を教へ、意志の強堅を教へ、信仰を教へ、傳道を教へ、折伏を教へ、忍耐を教へ、慈善を教ゆる等の有ゆる色讀實踐の方法を列示せるものたるを見るべきである。

「諸法實相ノ義、已ニ汝等ガ爲ニ説ケリ——汝一心

ニ精進シ當ニ放逸ヲ離ル可シ(序品)」

諸法實相とは何であるか、佛陀の説く所の真理そのものである、人生の生死、運命、苦樂昇沈等の問題を始め、天地宇宙の成立、本體、佛陀の實在、人間の歸着

徳的活動を教へたもので、空理を弄し空想に耽りて、世と懸け離れる様なことは佛法で無いことを示して居る、眞の色讀主義なのである、次に

「常精進菩薩、不休息菩薩、勇施菩薩——寶掌菩薩、寶積菩薩——得大勢菩薩、大力菩薩、無量力菩薩——導師菩薩(序品)」

等の種々の菩薩の名が擧げてある、余は常に是等の名を讀むごとに非常な愉快を感ずる、是等の菩薩を見るに晝寝をしたり遊戯雜談をして暮したりして居る様な横着な菩薩の名前は一人もない、其名を見ただけでも色讀主義活現主義を偶するの意が躍然として居る、常精進といひ不休息といひ勇施といひ皆精力絶倫勇氣横溢の有様が思はれる、寶掌とか寶積といへば殖産興業經濟の方面に努力活躍して濟世利民の事業に盡す如なことを思はせる、此の外、得大勢大力無量導師など、皆其名に於て活動力の充實せるを思はせる、更に又、
「施ヲ行ズルニ歡喜シテ布施スルアリ——鬚髮ヲ剃除シ法服ヲ被ルアリ——樂テ經典ヲ誦スルアリ」

等の幽玄なる哲理みな是れてある、是の如きの眞理は悉く如來は説き畢れても、是を悟つたといふだけでは死せる法華經である、談理的佛法である、佛弟子たる行者は、更に之を實踐躬行しなければならぬといふので、汝一心ニ精進シ放逸ヲ離ルベシと誡め、茲に活現主義を示し精力主義を鼓舞し、懶惰を去り放逸を離るべきを教へたもので、實に法華色讀の金言として眷々服膺すべきものである、方便品は、本門の壽量品と相並んで法華經の雙璧と言はれて居るのだが、此品は實に諸法實相の妙理を説き、一念三千の深義を顯はし、四一開會の妙談を示し、開示悟入の四佛知見を宣べ、殆んど法華經の教義を理論的に提唱し盡したるの觀がある、然しながら、此品の佛意は、唯深遠なる理論を述べて終らんとするものではない、「我ハ是レ佛ノ長子ナリ」悉く是レ佛子「佛々ヨリ生ゼシ所ノ子」の自覺を與へんとするので之を二乗成佛とも五乘開會なども稱するのである、而して此の佛子とは何であるかといへば、佛陀の心を實現するの人在いふ、佛意を色讀

する者をいふ、佛説の如く修行するの徒を言ふのである、斯る意義より觀察する時は、方便品は色讀主義の理論的教義を説明せりと云ふてよい、殊に色讀主義の中の重要點を示せることは、有名なる小善成佛の説である

「法ヲ聞テ布施シ、或ハ持戒忍辱、精進禪智等、種々ニ福德ヲ修ス——若シ人善觀ノ心アル——舍利ヲ供養スル者——萬德種ノ塔ヲ起ツル者——童子ノ戯レニ沙ヲ集メテ佛塔トナセル——諸ノ形像ヲ建立シ刻彫シテ衆相ヲ成セル——線畫シテ佛像ノ百福莊嚴ノ相ヲ作レル自モ作シ若ハ人ヲモセシムル——童子ノ戯レニ若ハ草木及ビ筆、或ハ指ノ爪甲ヲ以テ畫イテ佛像ヲ作セル——是ノ如キ諸人等漸々ニ功德ヲ積ミ大悲心ヲ具足ス——鼓ヲ擊チ角貝ヲ吹キ、歡喜ノ心ヲ以テ歌唄シテ佛徳ヲ頌シ乃至一小音ヲ以テセル——散亂ノ心ニ一華ヲ以テ畫像ニ供養セル——禮拜シ合掌シ一手ヲ舉ゲ少シク頭ヲ低レ以テ像ヲ供養セル——散亂ノ心ニ塔廟ノ中ニ入りテ一タビ南無佛ト

ことでも皆是れである、斯る心も本佛渴仰の信念を根柢として發する時は佛道を成ずる菩薩行であつて、法華色讀の一面なりとて宗教と道德との調和を示したのである、此の外舍利を供養する者塔を起つる者、童子の戯れに沙を集めて塔となせるなど、散亂せる心にも一たび南無佛と唱へる等、信仰的にあれ道德的にあれ是れ皆佛道の大果報に到るの法であつて、これらは次第に「功德を積み大悲心を具足す」で、佛心を活現し佛果を成ずべき、菩薩行、如説行——法華色讀の妙行である、此處に至れば法華經に顯示せられたる、謂ゆる法華色讀といへる範圍が如何に廣く如何に多方面なるかに窺はれる。

日蓮上人の警訓に云はく
闇なれども燈入りぬれば明かなり、濁水にも
月入りぬればすめり、明かなる事日月に過ぎ
んや、淨き事蓮華にまさるべきや、法華經は
日月と蓮華と也(法華經卷第六七一頁)

稱セン——皆已ニ佛道ヲ成シキ(方便品)」
これらは、大なる色讀主義である、即ち根柢を信仰に置き、如何なる小善、如何なる寸美をも獎勵して、絶對の大善たる成佛の道に回向せしめんとするのである即ち布施とか持戒とか忍辱とか精進とか禪智といへる如き凡ての善行爲を以て、悉く佛道上の福德に資するの意を示して、信仰と活動と道德の三面合一を知らしめたのだ。

若し人善觀の心ありと云ふに至つては、俗に言ふ善良にして優しく情深き心を持つといふ程の意にて、實際に世間に活動して善行善徳を積むとか、世に善く様な慈悲の行爲をなすとか云ふ大きな事よりも、其根本の心を取ることをいふものにて、唯同情の心に富み憐れと思ふ心深くして、日蓮上人の歌に「門に立ちものこふ人の聲さかば憐れと思へほどささずとも」とあるがごとくに一片の慈愛心同情心あると云ふ、此の心を推し進めて行けば、語を柔らげて話する事でも、老人や子供の手を引いてやることでも、下女をやさしく使ふ

東京廢兵院參觀の記

白雲生

府下北豐島郡栗鳴町所在東京廢兵院を訪ふ、同院の敷地は舊穴戸子露邸跡で、面積約一萬九千坪、樹木鬱蒼として幽邃閑雅、何となく清新の氣に充ちて居る、廢兵院は第二十二議會に於て廢兵法案を提出し、全會一致を以て之を可決し、明治三十九年四月法律第二十九號により該法案を公布せられたもので、四十年二月假廳會に於て廢兵を收容し、四十一年六月現所在地に移轉したのである、同院の收容力は二百名、經營は議會の協賛による八萬圓と萬志寄附基金の利子に依る、同院の收容者は、何れも國威發展のために勇敢壯烈なる突撃を敢てし、敵彈のために傷残をうけて不具廢疾の身の上となりたるもののみ、君國の大義を全ふせんとして身體の自由を失ひしものである、民族の獨立を保障せんとして犧牲となつたのである、誰れがまた敬意と感佩とを表せざるものがあらうか、
收容者の生活は家族的な生活で和氣洋々たるものである、下士以下は六疊一室宛を配當せられ、準士官以上六疊八疊との二室を給せられ、被服は院外服院内服器具に不足なく、煙草菓子郵便其他の日用品の給與あり、圖書室には書籍雜誌ありて悉く見しを得、亦温室花園樂器大弓小動物園もあり、時々萬志の演藝寄附による講談演花節太夫琵琶踊舞舞があつて、在院者は無限の娯樂を附けて居る、同院設備待遇同然する所とはない、けれども廢兵院が設立された當時は、同院の有志は感謝と慰藉を興ふるがために來訪するものが多かつた、が今では訪ふものも稀である様に見える、一時に熱するも急轉して冷却する同情は現代の缺陥であるといひ、一國の内外頗る多事紛雜を極めて居るの時、勇士が内陣に傷いて不自由の生活にあるを想ひ、其心情を察せればならぬとおもふ、青島攻圍軍の戦傷者も、日露役北清の役の戦傷者も、其君國に爲めに献げたる偉勳は同じである、報國盡忠の記念負傷は永久に朽ちず、國民の士氣を鼓舞作興すべき活ける力である、
全國に於ける同院入院資格者は、各戦役を通じて一萬八千人あると云ふ事である

時至れるにあらざるか

工學士寺尾與三

久遠劫來一切衆生に三徳一具常住不滅の本佛は、三世十方の一切衆生を救済し靈化せざればやまざる廣大無邊の大慈悲大智慧ましくして、こゝには好良藥の妙法蓮華經を末法の我等が貪瞋痴の煩惱重病を救はんとして留めをき給ふ、本化上行菩薩は佛勅を蒙りて大日本國安房小湊に日蓮と顯はれ、全世界を此本尊大慈悲中に統一して、「我此土は安穩にして天人常に充滿せり……衆生の遊樂する所なり……我淨土は毀れず」の大理想境を、此土に實現して一切衆生に世間の樂安穩の樂涅槃の樂を得せしめんと、建長五年四月二十八日より弘安五年十月に至るまで、「一切衆生の一切

の苦を受くるは日蓮一人の苦なり」「二十餘ヶ年の間他事なし、たゞ妙法蓮華經の五字七字を日本國の一切衆生の口に入れんとはげむばかりなり、これ偏に母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり」との大悲の叫びもさかばこそ、立正安國の大忠は良藥口に苦さか、大難四ヶ度小難數知れず、「日本六十六ヶ國島二ツの中五尺のからだを置くべき所なし」との大迫害も、我不愛身命但借無上道と捨身の弘法に、末法濁惡の大闇を破り初めてより六百六十餘年、其間「日蓮さきがけしたり和黨共二陣三陣」つゞけの祖訓に、一天四海普歸妙法の理想を實現せんと、香城に骨を碎き雪嶺に身を投

げて、身輕法重死身弘法の先師檀徒幾何ぞ、北條倒れ足利斃れ、織田豊臣の榮も夢の間、徳川三百年の平和は長かりしが、其間本北教徒立正安國の大忠を懐いて惡闘苦戰今に暢へえざる法燈明滅六百餘年の蹟を尋ねれば、鎌倉に永享法難あり、足利氏と衝突して京に天文法亂あり、畿内二十數個の本山寺院の焼打せられ多くの法弟檀徒戦死し、後、安土問答には織田信長と衝突し、大佛供養により豊臣に苦しめられ、兩度の不受不施の災厄に遇ひ、徳川家康とは慶長問答に衝突して遂に六條河原の慘刑あり、爾來政略により眞綿にて首締められ、或は毒藥の馳走に据えられたり、回顧せば正徳年間（今より四百餘年前）には本化の教化大河を決するが如く、日蓮上人入滅後二百年にして寺院數日本國に八萬餘を數へたりしに、今は五千未滿なり、蓋し唯一乘法一佛一王の日蓮主義は、立正安國の大忠を懷きて王佛兩面の大義名分を料明するにより、封建

幕府と衝突して之を折伏し得るか、信ぜさせらるゝか、然らざれば壓迫せられ滅亡せらるゝ理の當然なり、かくて封建豊臣以來、その迫害威壓をうけて度々の法難あり、漸次軟風吹き渡り徳川に入りて愈々著しく宗風頽に失せ、半ば天台化し或は念佛化して滅却のやむなきに至る、已に明治聖帝の出現あり、徳川の封建倒れて天津日嗣を仰ぐ聖代に入りしも、過去四百餘年の毒藥、全身にまわりしか今も夢幻の中に眠れり

明治聖帝の御登遐に遇ひ奉りてより、世の風雲穩かならず、大正二年は國民の暗涙と人心の動搖の中に暮れ、大正三年は今上陛下の御即位大典舉行なればとて國民の喜悅と希望を以て迎へられしに、一月一日には豆州沖に愛鷹丸沈没の慘事を傳へ、同月中旬には九州櫻島の噴火は焙岩を流し火の灰を雨らし櫻島の生物を全滅し、慘禍遠く薩隅二州等に及び、田園を荒廢し人畜を殺傷す、かく南方に火山の焦熱に苦しむの間北方奥羽地方北海道にありては前年の不作飢饉は、雪

中に米穀食料盡きて庶民松皮餅等の如きを抱きて餓死に苦しむなどあり、超えて四月初め、東京府附近は櫻花爛漫の時に、天雷電を降らし積ること數寸、續いて九州に炭坑の大爆發あり、一時に二千余人を生埋めとす、同月昭憲皇太后の御登遐にあふ、萬民悲痛何を以てか驚へん、次て關東地方に大水あり、北海道に又炭山爆發の慘事を傳ふ、案ずるに近年より近日に至り天變地天等の災害頻りに起るなど、六百數十年の日蓮上人立正安國論の當時に彷彿たりなどいふ人もあり加ふるにさきつ頃塊塞の小葛藤と思ひさや、露獨佛白英起つて戰ふに至る疾風迅雷も當ならず、全歐の過半忽に修羅場と化しぬ、而して我が日の本も正義の爲めに諒闇の悲涙中に干戈を取らざるのやむなきに至る山東の野膠州勞山灣等に忠勇の士を殺傷する二千余人青島陥落し近海又波濤かになりたるも、歐洲の大亂は愈々大を加へ、墨國起ち、土耳其動きて餘焰飛んで中亞細亞、亞弗利加に及ばんとせり、之れ世界未曾有の大闘争、大變事なり、是れ何等の兆ぞ、鴉鵲鳴いて

珍客來り蜘蛛かゝりて喜事を知る、小事すらかくの如し、立正安國論に曰く「世皆正に背き人悉く惡に歸す故に善神國を捨て去り聖人所を辭して還らず、是を以て魔來り鬼來り災起り難起る」又金光明經に云く「其國土に於て此經ありと雖も未だ流布せず捨離の心を生ず」これによりて之を見れば、世の人心濁惡に流れ正に背けるの故か、大法ありて流布せざるの爲めか、觀心本尊鈔に曰く「雨の猛きを見て龍の大なるを知り(中略)智人起り蛇自ら蛇を知る」と之れ何等の大瑞ぞ、瑞相書に曰く「經に曰く佛滅度の後に能く是經を持たんを以ての故に諸佛皆歡喜して無量の神力を現し給ふ」云云、撰時鈔に曰く「此の如く國土亂れて後上行等の聖人出現して本門の三つの法門を建立し一天四海一同に妙法蓮華經の廣宣流布疑なき者か」又曰く「一閻浮提第一の大事を申す故に第一の瑞相此處に起れりかくの如くんばまささを知るべし、閻浮提第一の大法まささ流布すべきの大瑞なり、此時に日蓮門下七教團統合歸一の聲起る、之れ

天來の獅子吼にあらざして何ぞ、日蓮上人の御聲にあらずして何ぞ、抑も四海歸妙は日蓮上人の遺命なり、而して閻浮同歸は日本の同歸に初まり、日本歸妙は宗門の統一に初まり、宗風復活に起る、之れ第一の瑞相起る所因か、或る人曰く七教團は其教義あり主張を異にし歴史を異にし經濟制度又別なり、異體同心は勿論なるも統合は困難にして到底行はれ難からん、余曰く日蓮上人は一人なり、教義も一、人格も一にして多方面ならんのみ、己に七教團各々分立してあるは不思議なり、純信仰的にあらゆる物を放棄して日蓮上人に歸れば自然に與ふなり、己に異體同心といふ、甲乙丙丁相互の異體同心にあらず、ある時は大に異體異心なるべし、甲乙丙丁、各々日蓮上人に異體同心なることはなり、甲乙丙丁相互の異體同心は直に壞るべし害ありて益なし、何ぞ他をいはん直に日蓮上人に歸るべし或人曰く宗法宗規の權外不法行為なりと、余曰く日蓮上人の宗法宗規にあらず、上人の理想實現に差障あるが如きものは、宗法宗規あらゆるものを破毀すべし、

檀徒は寺院の檀徒にあらず、宗門の檀徒日蓮上人の檀徒なり、寺院は住職の寺院にあらず、宗門の寺院なり日蓮上人の寺院なり、僧侶又法縁法類より直に上人の弟子にあらずや、皆上人一人に歸るべきのみ、或人の曰く、某々は云云、余の曰く其故を以て此聖業を傷つけんとするか、かゝる些未にかゝりて日蓮上人を忘れんとするか、四海歸妙の遺命をうけて六百余年、日本の三分の一も教化し得ず、宗門の統一すら不能をいひて拱手の輩は上人の前に懺死すべし、聖訓あり曰く「徒らに遊戯雜談してあかし暮さんものは法師の皮を着たる畜生なり」
「汝早く信仰の寸心を改めて速かに實乗の一善に歸せよ而らば即ち佛國なり」
「日蓮ささがけしたり和黨共二陣三陣續けよかし」
己にさきに述べたる大瑞あり大法廣宣流布の時、其先祥として日蓮門下統一の聲起る、宗風復活の叫びありこれ時の至れるにあらざるか、大陣己に破れたり、勇猛邁進せんのみ

「精神の修養」「思想の調整」に就て

(欣讀の聲、志求數發、捨邪歸正) 於伊豫之客會 影山 謙 二一

大僧正本多日生師風に雄偉の資、我國の思想界に向つて輪王大の獅子吼を續けらるゝこと既に年あり、近くは八代海軍中將の要請に應じて海軍々人諸士の爲めに、海軍大學校に於て「精神の修養」「思想の調整」兩題下に、多年蘊蓄の秘藏を開て詳々「日蓮主義」を講ぜらるゝ、而して其安大なる雄辯と該博なる論述は、筆記して既に帝國軍事教育會に由て送早く刊行せらるゝ、予や數年前此の邊陲に僻在し、己に久しく其の温容に接すること能はざるを遺憾とす、時適ま是の講演筆記二書の發兌せらるゝを聞き、直に購ふて備さ之を欣讀す、予元來一介性來の讀書癖、疎懶本より讀破するもの多きを爲さずと雖も、抑も又未だ曾て本書の如き有益なる書に接したることなし、仍て感讀之餘、遂に他に對して推稱薦讀するもの二十餘人、中には先輩あり、長友あり、爾汝の人あり、然り而して既に業に其閱讀を了れる人あり、今現に精讀中の人あり、又特に閱覽に携らんとしつゝある人ある也、兎角來往の問、是の書に對する驚喜、欣懐、諸種の讚辭、頻々として到るもの既に數人者、さるにても一個子の胸底、單獨の以て聽き流すに禁へざるもの有るを覺ゆるが故に、左に二三の事實を摘記して是の書に接せし多數讀者囑聲の「舉一例語」に代へん乎

〔一〕伊豫國今治町石原實太郎氏、氏は元專修大學の出身にして、其事

門は素より經濟學に在るも、該れて和漢の學殖に富み、居常深く故紙堆理に未だ曾て書籍を手を放たざる好恰の學者なり、加ふるに氏の家元來頗る封に俗に八年前都憲の推す處と成りて縣會議員に擧げらるゝ、爾來、議政壇上、侃々語々、卓厲風發、慨世憂國、警世恒に自ら以て處るの士なり、而して氏は從來眞宗の信徒たりしが、予の推稱に聽いて是の二書を劉覽せらるゝに及んで、歡激速かに喚起し、加之氏の篤學なる程り返へして四五遍精讀、所謂「讀書眼光底紙背」の結果、一遍は一遍より會心に入り、一讀は一讀より會悟に格り、其極學に上京、憧憬欣慕之餘情、親しく本多現下に面接せられ、具さに志求開法の結果、「五十年の迷夢豁然として一朝に醒めたり」とて、遂に眞宗の信仰を一擲して今や正に唱題五字の人と成り、盛に郷黨の間に立て本化の宗風及び宗學を鼓吹せられつゝあり

〔二〕時實秋種氏、氏は東帝大の法學士、現任愛媛縣警察部長にして、予と同縣同山の人なり、氏は眞言の家に生れ、青年期より繼續して久しく經濟の學に嗜み、加ふるに隨子百家の漢書と、深く西洋の哲學に通ぜらるゝ、法學士と謂はんよりも寧ろ文學士と稱ふに庶幾き迄に、文事修養の安汎なる好紳士也、氏も亦是の二書を精讀微見、深く會入せらるゝ處あり、豈稱復た嘆美、卷を捲ふて「實に近代稀有の名著」是に據て自

ら得るもの甚より多大、來る五月頃乃公用上京の機を以て、是非本多現下の警咳に接して親しく教を受くる處あらんとす云々

〔三〕木村字一郎氏、氏は和佛大學の出、夙に難波長者に其人ありと聞へたる加島廣國家に入て大同生命保險會社の社長に參し、現に同會社の第三部長、予が先輩にして最も長敬する人なり、氏も亦篤學の人、殊に重きを精神の修養に置かるゝ、氏時に或は地方に旅行せらるゝや、適ま宗敎の本部、又は宗務廳、若くは教會の所在地を過ぐれば、必ず予を留めて門に入り、刻を通じて其司會者或は長者等に面して、其宗派の教義、義學等を討れらるゝ等、以て氏の風格を知る可き也、爾り、而して氏が今予に與へられたる一輪の信書は、即ち是れ「精神の修養」、思想の調整」兩書に依て深く感動せられたる靈嘆の雷聲たり、爲道の公事固より敢て秘すべきの要諦にもあらざれば、左に之を披いて報道せんかな、四方信友道契清鑑焉

拜啓陳者日外御懇切に御勤め被下候本多大僧正著精神修養、思想調整の兩書直ちに購入致置候處、年末年始、内外雜務に忙殺せられ拜讀の暇無之其儘打過居候處、先般來少閑を得候に付き具さに拜讀仕候、然る處師の深遠なる御識見と該博なる智識と、加ふるに徹底せられたる信仰とを以て御論述相成候事、一字一句悉く生命ありて眞個近代稀有の大著述と可申、誠に難有拜讀仕候、殊に御承知にても候はん乎迂生義七八年以前より神儒佛耶四敎の一致點を認識し、爰に信仰の根柢を掘へ自分一個の信仰箇條をも有するものに有之、今此書に接して益々其信仰を固むる事を得候段欣幸至極に存候、唯聊か遺憾とする處は基督敎觀に於て其見解を異にする點に御座候、即ち近世新神派若くは復古派の唱ふる基督敎觀は師の本書に記述せられる處とは多少其意義異り候尤も本多師の佛敎觀として掲唱せらるゝ所、即ち眞如の實在

を理體と見ずして人格的のものとして御示し相成候點は宜しく基督敎の唱ふる神觀に異らざる様存候、又釋尊を眞如の活現體とせらるゝ點とエスを神の活現體と見る等も餘程能く似通ひ居候様に愚察仕候、尙又基督敎の教義は吾が忠君愛國の思想と撞着せざるのみならず聖書中「君主は神の立て玉ふものなり云々」又は王を尊むべし等の聖句各所に散見する所に有之現に我國基督敎界の大斗宮川氏の率あたる大阪教會の如きは忠君愛國を以て憲法の一箇條に加へ居候様の大抵に有之公平なる解釋に従へば決して我國體と相容れざる如きものには無之、殊に先帝陛下の御理想は基督敎の教義と一致せる點少からず彼の有名なる敎を受せよとの御訓に

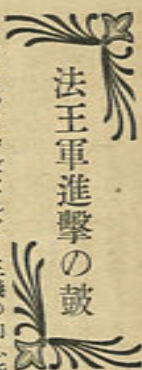
國の爲めあだなす寇はくだくとも
愛しむてふことな忘れぞ

と被仰候如き其他此類敎學に迫ららず候へば別段毒を含める宗教とは不致存況んや師の主張せらるゝが如く進んで洗鍊融合致候は我國國民思想に清新の氣を加へ大に活氣を添へ候事と存候、并は兎も角も多少徹底致し兼居りたる迂生の「四敎融合觀念」は多々益々明確を加へ大に進歩を覺え申候、是れ大兄が本書を御勤め被下候様に外ならず誠に感謝の至に不堪候、何れ再三拜讀の上更に御垂教相仰可申、尙々折もあらば一度本多大僧正の警咳に接し親しく御垂教相仰度ものと奉存不取敢右乍延引御禮旁如此候拜具

二月二日
影山 謙 兄玉案下
木村 字 一 郎

追傳、本文相認め了り候處へ貴翰又々郵來拜見仕候、「統一主義」は小生至極贊成に有之驥尾に附して愈々研究仕度存申候
今頃々として到る處の歡呼の聲、諸子皆な是れ當代先憂の名士、

法王軍進撃の鼓



法王の軍勢は少数なれども正義の向ふ所敵なく軍に抵抗する力なく或は逃げ走り或は深く降伏するものあり...

る武術は元氣を鼓舞せしむるものありて清新なる娛樂の中に精神調育と武士道の鍛錬を教...

▲同三十一日午後一時第一團日曜講演開會 如風 江見 乾丈 石川 顯隆...

師の信仰勸發の講話ありて多大の感化を與ふ ▲東洋大學福音會は毎週一回井村日成師を聘...

「眞實の四恩報者は本宗行者に限る 田久保日 城」 一月八日午後一時妙満寺に法王婚...

▲廿六日午後六時妙満寺に天晴會同志會京都 各本山有志に依て組織せんとする日蓮門下統...

は前年中の事務報告を爲し堀木幹事は三大秘法鈔の整理を閉讀し日蓮上人の志願を述べ統合問題の基盤を堅め次で客員あさひ雜誌記者の所感を述ぶるあり夫より役員の改選を行ひ幹事は重任評議員は野口細字中平太田吉田の五氏當選承諾又京都天晴會幹事西村喜一郎君は特に來會して統合問題に就ては京阪聯合運動の内約を爲せり

岡山

一月一日午前六時より本成寺國藏會及懇親會を催せり「七教團の統合に就て原田日勇」

▲七日和氣在山田村藤原勇三郎宅講「開會の経緯野健三郎」赤誠一貫原田日勇

▲十五日本成寺婦人會「迎新の信仰原田日勇」

▲十六日同寺同信會「清正公の強信原田日勇」

廣島

一月十二日午後二時松川町妙法寺に講演開會「佛室宅に就き大橋日」

▲十三日午後二時新川坊町本照寺に講演開會「心を師とせされ溝口會想」自覺的生活島田

▲十五日本照寺に天晴會を開く「日蓮上人の教義人格大橋日」講演後深井守之助氏の前年度決算報告あり將來發展の協議及福引等ありて閉會を告ぐ法益甚大

千葉

一月六日午後一日茂原町在庄吉福山乾英師の講演あり

▲九日茂原道路布敷を開催し秋葉日度秋山乾英山田誠心河野見中師の獅子吼あり

▲十二日午後一時押日來光寺に例月講演を開

き音機にて日蓮上人一代記を説明し多大の感化を興へたり
同夜同寺にて再開し山田誠心秋山乾英師の講演あり

▲十三日午後二時長柄村廣福寺婦人會開會音機にて日蓮主義の一代を紹介し山田誠心河野見中師の説明あり

同日夜同村道臨寺檀家安藤豐藏宅にて幻燈並音機開催秋山乾英山田誠心河野見中師の説明あり

▲十六日午後六時庄吉福庄寺に於て婦人會を開催し秋山乾英師の講演あり

▲十九日茂原道路布敷開催秋葉日度秋山乾英山田誠心竹内顯誠師の熱心なる導道ありたり

▲二十日午後六時如意輪寺檀家原田（もなか）宅にて幻燈を開催秋葉日度秋山乾英山田誠心竹内顯誠河野見中師の説明ありたり

▲二十三日午後六時眞名本源寺幻燈を開催し秋葉日度秋山乾英山田誠心河野見中竹内顯誠師之が説明に當る

▲二十四日茂原道路布敷を行ひ秋山乾英山田誠心師の信仰的熱火を以て人心を激勵せしめたりといふ

▲山武郡増穂村南横川芳境寺に於て大正三年十二月廿八日午後六時小竹俊雄師は「日蓮主義と敬神崇拜」と題して法華信仰の廣大なる意義を説けり從來同地方は男女七歳にも至れば俗に紐解祝と稱して社参りを爲せども祖先の冥廟たる菩提寺には参拜せざりしが今回三光寺檀家中古國三氏の長男眞一及び佐久間佐内氏長男正雄の兩人七歳の祝なりければ十二月

廿日祖父母等に連れられて三光寺に参詣し小竹師御本尊の御前に靈酒供物を備へて最も厳肅に讀經唱題し終り一場の訓話を爲し以て懐中本尊を授與したり斯かる儀式は同地方には稀に見る所に於て少國民時代に宗教的信仰の習慣を興ふることに何等かの効果を奏するを得べく誠に美事なりと云ふべし

▲一月元且午後一時同村南横川青年會の新年懇話會席上に於て小竹師は「興國と青年の修養に就て」講演を爲せり

▲二日午後増穂村富田消防夫出初式懇親會席に於て小竹師は「精神の訓練と統一的活動」に就て和衷協同の義を説けり

▲六日小竹俊雄師主催にて南横川有志一團の芳情と近隣僧員の援助とを以て常樂院日經上人御命日報恩會を修し次で戦病死殉國難者追弔大法會を嚴修し小竹師の追弔文並に村長福源之輔在郷軍人會々長北田高美剛氏の形辭及び戦病死者遺族等の焼香禮拜等あり小竹師は開會之辭を述べ秋葉日度師戦後の宗教に就て論評し成島泰行師農村と修養との關係を説き其大の感動を興へたり

▲廿六日午後六時同村原台芳境寺に於て小竹俊雄師は「心の訓練」に關し各方面より重要な意義を明かにせり

▲廿六日午後六時同村原台芳境寺に於て小竹俊雄師は「心の訓練」に關し各方面より重要な意義を明かにせり

▲廿六日午後六時同村原台芳境寺に於て小竹俊雄師は「心の訓練」に關し各方面より重要な意義を明かにせり

▲廿六日午後六時同村原台芳境寺に於て小竹俊雄師は「心の訓練」に關し各方面より重要な意義を明かにせり

▲廿六日午後六時同村原台芳境寺に於て小竹俊雄師は「心の訓練」に關し各方面より重要な意義を明かにせり

▲廿六日午後六時同村原台芳境寺に於て小竹俊雄師は「心の訓練」に關し各方面より重要な意義を明かにせり

▲廿六日午後六時同村原台芳境寺に於て小竹俊雄師は「心の訓練」に關し各方面より重要な意義を明かにせり

▲廿六日午後六時同村原台芳境寺に於て小竹俊雄師は「心の訓練」に關し各方面より重要な意義を明かにせり

▲廿六日午後六時同村原台芳境寺に於て小竹俊雄師は「心の訓練」に關し各方面より重要な意義を明かにせり

▲廿六日午後六時同村原台芳境寺に於て小竹俊雄師は「心の訓練」に關し各方面より重要な意義を明かにせり

▲廿六日午後六時同村原台芳境寺に於て小竹俊雄師は「心の訓練」に關し各方面より重要な意義を明かにせり

▲廿六日午後六時同村原台芳境寺に於て小竹俊雄師は「心の訓練」に關し各方面より重要な意義を明かにせり

軍國民の必讀すべき書

▲本書の内容における價值は世已に定評あり嗚々を要せず
▲現在十數部在るのみ二月廿八日迄に申込みば直ちに發送すべし同日以後は販賣せず再び刊行せざれば購讀の機會を失ふべし

天晴會講演錄

(第貳輯) (價格金貳圓也) (郵税金拾貳錢也)

内 林陸軍中將。本多大僧正。井上中佐。小笠原子爵。小林文學士。高島平三郎先生
辻文學博士。松森僧正。五島子爵。姉崎文學博士。柴田一能先生。竹内久一先生
田中智學先生等の講演也

精神の修整調養

各一部 金貳拾錢也
二部 小包 金八錢
一部 郵税 金六錢

本書は本多日生師の海軍大學校における精神講話にして、帝國軍事教育會に於て印行したるもの。思想問題に注意を拂ふものは必ず本書を一讀せざるべからず

▲申込送金——東京小石川區白山前町十七番地 三上義徹。(振替口座東京二八八四〇番)



腦胃の能醫

NOI is No. 1

「腦と胃は極めて重要な關係を有す然るに腦神經を鎮靜する藥物は概ね胃腸の機能を害し姑息的たるを免れず本劑は腦神經藥たると同時に消化器を健全ならしむる作用を有す故に理想的の好結果を得べき事を確信す

主治
効能

神經衰弱 ● ヒステリー ● 不眠症 ● 腦痛 ● 頭痛 ● 惡夢 ● 胃加答兒 ● 胃弱 ● 消化不良

● 藥價三日分金參拾錢 ● 五日分金五拾錢
本誌讀者に限り約三十%の割引特權あり
希望者はハガキにて申込を乞ふ

▼ノ一キはイキ藥▲

東京市下谷區上根岸町百十一番

金澤山石堂

電話下谷三二五九番

マスター、オザ、アツラ 柴田一能君著

現代百科文庫 宗教叢書

立正安國論略解

(一部郵税共金十二錢) 袖珍美本百十頁

自然主義に満足せざる現代人は靈の宗教を求む宗教の中にも聖日蓮の論道せられたる大主義に來らんとする氣運已に熟せり此時に當り本書著るは本書は通俗的に立正安國主義を明かにし聖日蓮の卓越の識見を説く

鎌倉時代の概観。聖日蓮の背景。當代佛教の内狀。聖日蓮の盛奮。岩本實相寺の入藏。立正安國論とは何ぞや。立正安國論の題意。立正安國論の結構。本論の文學。遺文に於ける本論の位置。本論の異本。本論の進達

▲日蓮主義研究家の一讀すべき良書なるは勿論進呈用として尤も佳也

東京小石川白山前町十七

發賣所 三上義徹

(振替東京二八八四〇番)

日宗法衣専門

青雲帽 希教服 袴

此外法衣付屬品一切

京都佛具屋町五条

飯田法衣店

振替大阪六八四七

小店調製の品は價格低廉品質純良且裁縫精巧等は勿論殊に格好の尊嚴に至つては到底他店の模倣を許さざる自然の特徴を有し候
小店は御注文の御素志に反する如き不手際不親切等は斷じて無之御申越次第御満足迄誠意見本を提呈し萬遺憾なからん事に期し居り候

本誌の定價	▲一部郵税共金六錢五厘○半年分金參拾九錢一ヶ年分金七拾八錢。新購讀者は前金拂込されば發送せず
廣告料	表紙うら。うら表紙一頁金拾圓半頁六圓。普通廣告欄は一頁金七圓半頁四圓希望の者は紹介の事
雜誌及廣告料金拂込	東京小石川白山前町十七番地三上義徹振替口座東京二八八四〇番へ拂込むべきこと

▲交換——新聞雜誌。新刊書の寄贈其他申込編輯に關する用件は編輯所へ御送附御願候
▲讀者の特權——本誌讀者にして日蓮主義に關する理解を發表せんとするものは、一行廿四字詰に認めて送らるべし本誌に掲げて廣く世に紹介すべし(但し採否は編者の權内とす)

▲講演の需めに應ず (申込は編輯所へ) 本誌讀者にして國のため人の爲め日蓮主義講演會を開かんとするものは御申込次第何時なりとも應諾可致候(但し旅費は實費だけ)

大正四年二月十五日印刷發行

發行兼編輯人 東京市小石川區白山前町十七番地 三上義徹
印刷人 鈴木日雄

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 團
編輯所 東京市小石川區白山前町十七番地 (電話下谷六千三百十番)

(一 統)

號十四百二第

可郵物便郵種三第日四十二月二年十三治明
(行發日五十月年)行發日五十月二年四正大

天晴會發行 ■ 大正三年度 ■

天晴會講演錄

第三輯

定價金壹圓五拾錢

本文約八百頁
總クローニス製美本
日蓮上人御尊像及
講演會寫真入り
送(内)地拾八錢
料(朝鮮滿洲臺灣)四拾錢

萬古の偉聖日蓮の絶叫したる抱負識見は凜乎として人心激勵の活力を有す現代人は須らく日蓮の如き精力と意氣とを養はざる可らず人生優勝の地位は日蓮の大氣宇に感孚し得て眞に徹底的なりと云ふべし人間の全生活を無限に發展せんとする現代人は先づ必ず本書を讀むべし本書は日蓮魂に依て靈化せられたる名士の内的生活の公開なり内容の如何に豊富なるかは一讀して之を知るを得べし
直ちに一本を購ふて其の身心の莊嚴に努めよ身心の莊嚴と向上とは人生の重大問題なり此の大問題の解決指導は正しく本書内容の特色として紹介するを幸榮とする所速かに本書を讀め

▲思想會の羅針教書 二十日發行 一刻も早く之を讀んで自己の思想生活の充實を期せよ

發賣元	東京市神田區 美土代町二、一	三	秀	電話本局二〇七九番三三八四番 振替口座二五七四七番
發賣所	東京市小石川區 白山前町十七	三	上	義
				徹

青島視察談

大正四年三月十五日發行(毎月一週十五日發行)

信仰と寺院

海軍少將 佐藤鐵太郎

東京美術學校教授 竹内 久一

小原陸軍少將を訪ふ

記者

不朽の名譽を發揮せよ

三上 義徹

吾が信仰の經歷

愛國生命保險會社 監事 鹽谷 時重

大僧正 本多 日生

統一

號一十四百二第

號月衆

佛教の統一觀